

もしかしたらあったか  
もしれない世界

究極の猫愛好家

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

本作品は、「小説家になろう」投稿作品の「シヤングリラ・フロンティアくソゲーハ  
ンター、神ゲーに挑まんとすく」の二次創作短編集です

短編集といいながら続いたりしますごめんなさい

6月11日にTwitterにて登場した楽羽ちゃんが多めに登場します

今回が処女作なので拙く読みづらい物となっておりますが生暖かい目で見て頂けると  
とすごくありがたいです

誤字脱字、ダメ出し等お待ちしております

# 目次

	男子高校生とモデル	楽羽×鯉	1
	男子高校生とモデル	楽羽×鯉 2	7
	男子高校生とモデル	楽羽×鯉 3	13
	男子高校生とモデル	楽羽×鯉 4	18
	男子高校生とモデル	楽羽×鯉 5	25
	男子高校生とモデル	楽羽×鯉 6	31
	男子高校生とモデル	楽羽×鯉 7	39
	男子高校生とモデル	楽羽×鯉 8	44
58	男子高校生とモデル	楽郎×永遠 2	
50			
65	男子高校生とモデル	楽郎×永遠 3	
	男子高校生とモデル	楽郎×永遠 4	
70			
	男子高校生とモデル	楽郎×永遠 5	
76			
	見学者と失恋	楽郎×玲	92
	前途多難な恋心	楽郎×京極	100
	心は乙女な外道モデル	楽羽×永遠	
106			
	私の光	楽郎×紗音	111
118	伝えられなかった言葉	楽郎×京極	

感謝の気持ちを込めて 楽郎×エムル

(?)

126

Qこれは修羅場ですか？Aはい、これは

修羅場です！ 楽郎×紗音×玲 | 133

現実ノンストップギャルゲー 鯉×芋

142

ありえたかもしれないハーレム | 149

ありえたかもしれないハーレム 2

161

興味が本気になる時 楽郎×頼華

167

# ゲーマーの恋 楽羽×鯉

私は帰り道にふと、世界は案外狭いものだなあと思っていた。

そりゃあ自分のゲーム仲間が現役トップモデルや、現役プロゲーマー、果てには同学年の完全無欠文武両道の美人さんとなればこうもなる。

それに対し私は特にこれといって特徴の無い普通のクソゲーマニアだ。

周りの超人たちに驚くことなんて多々ある

なんてことをポケ〜と考えてると外道文房具からメールが来た

『ねえねえサンラクちゃーん今週末空いてるかな？空いてるよね？日曜の夜にカツツオ君と3人でご飯食べに行かない？』

『なんで私にも予定がある可能性とか考えないのかなあ！』

『いやそんなの知ったこっちゃ無いしねえ。それに予定がないのはしつかりと瑠美ちゃんに確認とつたからさ〜。と、言うわけで日曜の午後5時半に前にオフ会した所にちやんとおめかしして来ること〜』

「おのれ邪教徒め！何故私にはプライベートが一切存在してないのだ…」

この後とぼとぼと家に帰ると笑顔の瑠美が大量のファッション雑誌を積み重ねて

待っているのを見て更に絶望をする…

~~~~~当日~~~~~

「やっと来たね楽羽ちゃん待ちわびたよ！こんな美女2人を待たせるなんて罪だよ！」

「いや僕は男なんですけど…てか待ちわびたって言うけど君が来たのも5分くらい前だよね？1番待ったの僕なんだよ？」

「シヤラップ！言わなきやバレない事を！」

「というか、早く入ろうよ私幕末に行ってたからお腹すいたんですけど」

「それもそだねえ私もお腹すいてきちゃった。まったくカツオ君のせいでまーた疲れちゃったよ」

「あれ!?これ僕が悪いの?いや違うよねえ…絶対違うよねえ…」

ふうなんかこの席も懐かしいなあこの前もここだったっけかなあ…

そういうえげなんのであいつは急に飯に誘ったんだろ?

「なあペンシルゴン」

「?どうしたの?」

「いや、なんで今日は私とカツオをわざわざ誘ったのかなと」

「あーそのことね、いやね私が主演の映画の試写会に2人を呼んで見てもらおうかなあ

と思つてね」

「あの恋愛映画？多分僕は見に行けるだろうけど学生の楽羽ちゃんは見に行けるの？」

「あくそれについては大丈夫日曜日の予定だからね！2人ともしつかり来なよ？」

「一応聞くけど何日？友達との予定あるかもしれないから」

「23日の日曜日午後1時から上映開始だよ！」

レイ氏に買い物に誘われてたのは22日だったよな？

「その日なら空いてるかな。その前の日にレイ氏と買い物に行くけどさ」

「モモちゃんの妹？ホント2人って仲良いよねえ」

「まあ同じ学年だし？シャンフロもよく手伝ってもらうからね」

『絶対違う気がする…なんか2人が話していると後ろに百合の花が見えるもん！ペンシル

ゴンはどう思う？』

『あー分かるかも。なんかあの子他の人が楽羽ちゃんと話していると一瞬目からハイライ

ト消えるし…』

『まあ、楽羽ちゃんには頑張ってもらうしかないね！』

『そだね！（諦め）』

「まあ青春してるみたいだしいいんじゃない？」

「え？なんで2人ともそんな慈愛の眼差しなの？え？怖…腹立つからカツツオの金で食

いまくるか!」

「そうだねえ。とりあえず唐揚げギガ盛りセットいこつか!」

「?!? まって!?今日は割り勘じゃないの!?せめて食べ切れるのにしろよ!」

~~~~その後の3人:楽羽side

ふう流石に食べ過ぎちゃったかな:

レイ氏はスタイルいいし今度聞いてみよつかかな?

帰ったらとりあえずかるーくゲームかなあ

あ、その前にカツツオに連絡して23日の予定でも立てなきやだよな?

はあ:服に関してはまあ瑠美に任せればいつか!

~~~~カツツオside~~~~

久々にアイツらと会えて楽しかったなあ:

というかペンシルゴンは毎回急すぎるんだよなあ:今回は何を企んでいることやら

:

とりあえず服をどうするかだなあまあメグに頼んでいい感じにしてもらうか

~~~~ペンシルゴンside~~~~

ふうこれで休日にあの二人が会うのが確定したねえ



何故かカツツオ君は自覚があるかは分からないけど楽羽ちゃんのことを少し意識してみたいだしねえ…2人が仲良くなるように少し手助けしてあげようかなあ（＾＾）

とりあえずあの子に連絡するのが先決だね

『はい…こちら瑠美です！どうなされましたか永遠様？』

「瑠美ちゃんやつほーいや少し頼みたいことがあるんだけどs」なんでもやります！  
国の制圧でもなんでもやれます!!」なんでそんなに食い気味にテロ行為を行おうとするのかは分からないけどありがとう！」

『ところで私は何をすればいいのですか？』

「いやあ難しいことじゃないんだけどさ23日に楽羽ちゃん出かけるからさおめかししてあげてくれないかな？」

『永遠様の為ならば！』

「度々ごめんねえよろしく頼むよ！」

ふう…これで23日は大丈夫そうだな後は2人がどうするかだけどゆっくり眺めるとしようかねえ…

~~~~一方その頃~~~~

「はっ！近いうちにライバルが現れるような気がする！」

どっかの揚げ芋さんは嫌な予感を感じ取っていたとかなんとか

## ゲーマーの恋 楽羽×鯉2

はあ…

やっと今週も終わる…金曜日までが長すぎんよオ

「はあ…」

「あのさ陽務さんや、人の顔みてため息とか失礼極まりなくない?」

「すまん雑ピ君や。割と予定が詰まっててねえ」

「ココ最近マトモに名前と呼ばれてない気がする…流石に覚えてるよな?」

「ハハハハ流石にクラスメイトの名前くらい…」

「え? まって、嘘でしょ? 冗談だよな? ね?」

うおつみんな一斉に顔逸らしやがった

「冗談だろ…」

「冗談だつて! 元氣出せよ流石に覚えてるさみんなで言うぞ! セーの」

『暁ハート!!!』

「もはや涙すら出てこない…もういいや…あ、そだてかさ聞きたいことあるんだけどいいか?」

「こいつメンタル強くなったなあ…」

「?なんかあったのか?」

「いや明日空いてたら遊ぼうぜって誘いたくてさ」

「いや、明日はレイ氏と買い物に行くからさ」

「あーね、理解した。なら明後日は?」

「こいつらマジなんでレイ氏のこと話すと若干生暖かい目を向けてくるんだろ?今度カッツオ辺りにでも聞いてみるか」

「明後日も空いてないかな」

「ほへえいつもゲームしかしないお前がどうして?」

「知り合いと映画に行くんだよ」

「へえとところで誰?」誰と行くんですか楽羽さん!!」 oh……」

『さて今どっから出てきた』(クラスの心が1つになった瞬間)

「あ、おはようレイ氏どつたの?」

「あ、おはようございます。じゃなくて!ららららら楽羽さん誰と映画に行くんですか!?!」

「ああカッツオとちよつとね。まあ明日は行けるから問題は無いよー」

後少し洋服も見てもらいたいしね」

「あ、はい分かりました。楽羽さんが映画はなんとというか…その…」

「意外だった？」

「あ、いえ、そんな訳では…」

「大丈夫だよw私もあんまり見ないけどたまたまチケット手に入っちゃったしたまたま一緒にいたカツツオと行くことになっただけだよ」

「そのカツツオさんと一緒にいたって言う話を詳しく」

…なぜレイ氏はたまにこんな積極的かつ獰猛な獣の目をしているんだ

サツと周りを見渡すとサツと目を逸らされた

…よし

「よしレイ氏ちよつと手伝ってもらっていいかな？」

「?はいいいですけど何を？」

「いやね、あそこにいる福耳ピアスを後ろから羽交い締めにしてくれる？」

「??了解しました？」

「おい! まで! まで! まで! くれ齋賀さん! 俺が何したって言うんだ!」

「やあ暁ハート先生や、なんか目を逸らされたのが腹立つからピアス穴拡張の刑に処す」  
「だからなんでそんな非人道的なことが出来るんだ! うわっちよつまっ」

?…なんで、こいつ顔赤くしてるんだ?

「ふうこれくらいでいいかな。ありがとうレイさん」

「いえいえ楽羽さんのお手伝いが出るのであれば」

「そっか！明日は楽しもうね？」

「はい！」

あれ？なんで雑ピは教室の隅に連れていかれてるんだ？

『暁軍曹貴様は我々の立てた条約を無視したよつてここに魔女裁判を開始することを宣言する！』

『『うおおおおおおお!!!』』

『おいまして！さっきのは偶然だろ!?俺悪くないじゃん！それに魔女裁判とか許す気ゼロじゃん！』

『安心しろ我々が納得すれば処刑だけで許してやる検事、どんな刑を執行するべきだと思おう？』

『いつも通りピアス穴拡張の刑でよろしいのでは？』

『まって!?こつち弁護士いないのですか!?』

『いるぜ！この俺が弁護人をしてやる！』

『お、お前…（；?；）ありがとう…』

『裁判長！今回は偶然だったこともあるので昼休みに暁ハート先生の新作を校内放送の

刑でいいのでは?』

『まって! 弁護人が弁護してない! より被害を悪化させてる!』

『ほうこれでも嫌と?』

『嫌に決まってるんだろ!』

『感触どうだった?』

『いやめっちゃ最高前も後ろも大きい愛に包まれてそれはもう…はっ!』

『刑確定!』

『お願い待って! 待って! 待って!』

『なら本人にどうするか聞いてみよう! おーい陽務さん』

およ? 呼ばれた

「おう、どうした?」

「いや今日の雑ピの処刑方法を決めただけど執行していい?」

「いいぞ!」

「( )。□。( )」オ——イ!! 助けてくれえ! 誰でもいい! 誰でもいいんだ!」

『え? やだ?』

「このクラス悪魔しかいないのか?!?!」

「ほうなら楽羽さんも悪魔と言うことですか?」

「あ、やべ地雷踏んだ」

うおっすげえなみんな雑ピに合掌してる…私もしとくかな

さらば雑ピまた会う日まで

その後顔から表情が抜け落ちた雑ピが発見されたとかなんとか

そのまた後の昼休みにポエムを放送されて発狂してる人がいるとかいないとか

その日の日の教室では腹筋崩壊して昼飯を食べ逃した美少女がいたそうだ



## ゲーマーの恋 楽羽×鯉3

やって来ました7月の23日！集合時間は11時！現在の時刻9時半！今日は仕事で2人がいないから家族ルール無しだと思つて油断してた！少し不味いでごさる！

『瑠美い助けてえ!!!』

『お姉ちゃんなんでまだ着替えてないの!?』

『昨日ゲームやりすぎちゃった（ノ≧?≦）☆』

『はっ倒すよ?』

『ごめんなさい』

『あーもう！なんで毎朝私が身支度やってるのさあ!』

うわあすつごい顔してる…鬼みたい…これ言ったらガチギレされそうだからやめとこつと。とりあえず服の準備しますかねえ

~~~~30分後~~~~

「行ってきマース」

「行ってらっしゃい…（ハハハ）ハアハアゼエゼエ…」

サクサクツと行きますかねえ

くくくチャットルームくくく

瑠美：お姉ちゃんが今出ました！

永遠様：あれ？流石にちよつと早すぎじゃない？

瑠美：なんか2人でお昼を食べてから行くみたいですね

永遠様：!?!? そうなの！そんな面白そうなお姉さん聞いてないんですけどお

ちよつとキツかったらしいのでお姉ちゃんが誘ったみたいで一人で行くのは

永遠様：ああ見たかったあ！もうちよつと遅ければ見に行けたのに！

瑠美：まあそちらの方は任せました！

永遠様：りよーかいありがとね瑠美ちゃん今度カツオ君連れて遊びに行くから

瑠美：やったあ！楽しみにしています！

永遠様：今度空いてる日教えてくれる？

瑠美：いつでも空いています！永遠様が来るならいつでも!!!

永遠様：そ、そっかわかったよ…（この子凄いなあ…）

くくく一方その頃くくく

「やつほくくお待たせく待ったか？」

「いや、待つてないよてか少し早くない楽羽ちゃん？」

「カツツオの方が早かった癖に何言ってるのさw」

「これでも男なので女性を待たせるわけにわねえ」

「男？ああそういえば割り箸とプルタブで100スレ軽く突破したみたいですね」

「やばい！カツツオの目からすんつと光が消えちった！やばw」

カシャカシャカシャ

「ちよつと！人が落ち込んでるのになんで写真連写してるのさ！」

「いやさ？人の落ち込んでる姿とか最高じゃん？特にお前のか後で旅狼に載せようと

思ってたさあ〜」

「やめて!?!せめてペンシルゴンだけにしてくれ…」

「どんどん元気が消えていくうー最高だぜ！」

「はいはいさっさと入ろうねえ」

「(☒・ω・☒)。(o?)ゲセヌ」

~~~~~店内にて~~~~~

「おお内層めつちや好みだどうしよう

さーて、メニュー表つとやべえオシヤレすぎる…」

「楽羽ちゃんは何頼むの？」

「うーん、私はポロネーゼとカルボナーラで迷ってるんだよねえ…」

「なら僕がカルボナーラ頼むから一口ずつ交換しない？」

「おお！いい考えじゃん！乗った！こういう時にだけ頭が良く回るな！」

「おうこのアホ娘ナチュラルにバカにしてきますねえ！」

「こんなに可愛い現役Jkと食事出来て楽しいだろお（＾＾ω＾＾）」

「Wwwまあねたまにはこうやって楽羽ちゃんと2人きりで食べるのもいいかもしれないね」

「はあ!?いつ急に何を!？」

「は、はあ!?急に何さ!ビックリさせんなよ!つたく」

「ええめつちや理不尽!？」

「すいませーん注文したいんですけどー」

~~~~~15分後~~~~~

「しりとりもここまで続くと楽しいなこれw」

「僕は割と疲れた!？」

『お待たせ致しましたー』

おお!なんて神々しい!

「あれ?楽羽ちゃんってそんなにパスタ好きだったっけ?」

「いや、基本的になんでも行けるけど割と前々からここに来たかったんだよねえー人

じゃ敷居が高いし…だからありがとねカツツオ」

「!?ど、どういたしまして…（急にそんな笑顔で言うのは反則じゃないかな…）」

「?なんか言ったか?」

「いや、なんにも」『なあんで、こんなに鋭かったりするんだよオというかなんで僕は楽羽ちゃんに照れてるんだろ?』

「まあいいやー口ちようだい?」

「ああいいよ?ほれ」

「!?うまつ!!じゃあこつちも食べよカツツオ!」

「あ、ほんとだ美味しい…今度からここに通おうかな?」

「クソ!金に余裕のある人間は!」

「www大丈夫だよその時はしっかり楽羽ちゃんも誘うよ」

「やった!奢りだ!」

『こいつらイチヤイチヤするの勘弁してくれないかなあ』店内の皆様的心が1つになつた瞬間

「さあて腹も膨れたしそろそろいこつか!」

「そうだねえそろそろ行こうか」

## ゲーマーの恋 楽羽×鯉4

「はあ美味しかったなあ…」

「ホントそれ楽羽ちゃんまた食べに来ようね?」

「おう!てかこの近くに気になるアイス屋さんがあるんだよねえ」

「行ってもいいけどその前に映画だよ。少しでも遅れたらペンシルゴンに煽られる」

それはまずいな全力で避けたいところだが…アイスクリームもなあ…

食べたいんだよなあ…(…ω…)

「なんだよその微笑ましそうな顔は!」

「なんでもないよw後でアイス奢るから早く行こ?」

「やった!行くいく!」

我ながら凄い現金な人間だなあ

「てかさ楽羽ちゃん」

「?どしたの?」

「人から聞いた話なんだけどサバイバルガンマンやってたってほんと?」

「そうだぞー周りからはμ—s k yって呼ばれてたなあ」

「sky? なんの略なの?」

「サイレント・キル・幼女の略」

「怖っ!」

失礼だなあこいつ

「これのせいで幼女が分からなくなり少女向けのアニメとかを見てロリコンに目覚めたやついるんだぜ?」

「テロじゃねえか!なんて惨いことを…」

「可愛いやろ!」

「これのキャラメイクどうやったの?」

「小さい頃の私をモデルにして作ったんだよねえ」

「え? そうなの? 見てみたいなあ」

「そんなに見たいの? まあいいけどさほれ」

「うおっ! かわいい! でも待つて? こんなちっさい子に撃たれるとかガチなトラウマになるやん」

「大丈夫じゃね? もはやこんな可愛い子に撃たれるんだから本望じゃね? てか私は小さい頃は可愛いんじゃないかって小さい頃も今も可愛いんだよ!」

「大丈夫w今もすっかり可愛いよ」

「!?まさか合わせて言ってくるとは…自分で言ってもなんか恥ずかしいな…」

「なあカツツオの写真レスにながしていい?」

「急になんで!?まって!はやまらないで!」

お、ついた時間的にもそろそろだし急いだ方がいいかもな?

「カツツオ急ぐぞ〜」

「まってさっきの話について語り合おう!ねえ!ねえつてば!」

〜〜上映終了後〜〜

「ふうもう終わったねえアナウンス通りだともうそろそろ舞台挨拶始まるみたいだけど?」

「てことはアイツが出てくるのかああいつの顔みて笑ってやろうぜ!」

「わあ悪趣味☆楽羽ちゃんや舞台挨拶始まるまで感想話し合わない?」

「ああいいぞ、最後凄かったよなジョンがマイケルを裏切ってメアリーと駆け落ちする

ところとかさ!」

「楽羽ちゃんは一切なんの映画見てたの?この映画学園青春ストーリーなんだけど?」

「冗談だつてwwまあ流石ペンシルゴンだな。誰よりも自然で綺麗だったな」

お、始まるみたいだな

『それでは皆様大きな拍手でお迎えください!主演の天音永遠さんです!!』



「よろしくおねがしま〜す♪」

数分後…

『えー皆様が揃い自己紹介も終わったところで主演の天音永遠さんに今回の感想を聞きたいと思います！』

「はい、私は今回のオフアアが来た時自分の学生時代とは違うようなものだったので私の友達が今ちようど高校生なのでその子の感じをモチーフにしてやってみました！今回は懐かしい学生気分を思い出せた楽しい撮影でした！」

『永遠さんありがとうございます、お次はなんと！サプライズのルーレットがあります！お席の番号が当たったら一緒に来た人と壇上が上がってください！天音永遠サイン入りCDを3組にプレゼントします！それではルーレットスタート！』

毎度思うけどドラムロールってなんか音でかいよなあなんて思ってたら続々と当たった人達が壇上に行つてペンシルゴンからCDを貰っていた

「なあカツツオ君や」

「なんだい楽羽ちゃん」

「今私絶賛嫌な予感するんだけど気の所為？」

「奇遇だね僕もすごく感じてる」

『それでは最後の人をお願いします！お出ました天音永遠さん発表お願いします！』

「では！Iの51のペアの人お願いしまーす」

「ねえねえ楽羽ちゃんや」

「なんだいカツツオ君や」

「僕たちの列何だけっけ？」

「I列ですネ」

「番号は分かるかな？」

「51と52ですネ」

「まじ？」

「まじ」

「……なんで……」

「いや私はアイツが出てきた時点で察してたかなあほら見なよアイツのニヤケ顔」

「＼（＾o＾）／」

カツツオが壊れた…

これ早く行かないと急かされるな…しやあない手を引っ張って行くしかねえな

「早く行くぞー？」

「?!え?ちよ、まつら、楽羽ちゃん!?!」

『おお次のペアのお2人は仲良く手を繋いでのご登場です!』

「やったね！慧！私天音さんの大ファンなんです♡」

「そうなんですか？ありがとうございます〜♪お礼にサインにちよつと手を加えちゃお〜と♪」

「ホントですか？やったあ！」

「（これ僕いる意味あるかな？）よかったね楽羽ちゃん（???）」

「それではこれで終わりにしたいと思います！それでは出演者の皆さん！観客御来場の皆様ありがとうございます！」

〜〜外にて〜〜

「楽羽ちゃんテンション高かったねえ」

「そうしなきゃ行けない雰囲気だったしそれにカツツオ君よおこのCD見ろよ」

「?…!これは」

『2人とも仲良さそうだねえ（ ^ ω ^ ）後で話し合おうね（ ^ ω ^ ）』

「もう諦めたわ私」

「同意、、てかそろそろ良い時間だし帰ろつか」

「まてカツツオ君や君は約束したよな？」

「???何をかな（?▽?;）」

「アイスクリーム行こつか（ ^ ω ^ ）」

「クソ！ 忘れたフリしてたのに！」

後に財布から2000円ほど消えて（ ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ）としたカツツオと満面の笑みの楽羽ちゃんがアイスを食べさせあつてたとかいないとか

~~~~東京某所にて~~~~

「え!?! メグそれホントに行ってるの!?!」

「ごめん…その日法事があるの忘れてたの…だから相方の人は誰か代役立ててくれないかしら?」

「代役か…僕と一緒に戦えてああいう場でも物怖じしないゲームプレイヤー…あの子に頼むしかないな…」

## ゲーマーの恋 楽羽×鯉5

はあまーた今週も始まったなあまあ昨日が楽しかったし今週水曜日休校日だからゆっくり出来るか…でも水曜日特に予定ないんだよなあ…ロックロールは今週いっぱい臨時休業だしなあ…（…いっわー）

「ら、楽羽さんおはようございます!」

「あ、レイ氏おはよおー」

「昨日の映画は楽しめましたか?」

「うん! 行きたかった所とかたくさん行けたし楽しかった! レイ氏も今度一緒に行かない?」

「ご、ご一緒させて貰えるんですか!?! はい! 是非行かせてもらいたいです!!」

「お、おう行こうね?」

朝からテンション高いなあ…流石レイ氏…お、もう学校についたな

「今週いっぱいロックロール休みだから気をつけてね?」

「え? 岩卷さんまたいいの見つけたんですか?」

「そうみたいだね…なんか昔のプレミア品見つけたらしいからさ」

「そ、そんなんですか…もう着いてしまいましたね、あ学校に着く前に渡したいものがあるんですけど…」

「?どうしたの?」

「こ、このブレスレットを一緒に付けて欲しいのです!」

「え? いいの? やった! ありがとうレイ氏! というかゲームの外ではレイ氏じゃなくてレイちゃんって呼んでいい?」

「は、はい! ありがとうございます!」

ああもう! レイちゃん可愛すぎるでしょ!

「ありがとね! レイちゃん!! 大切にするからね!」

ギョツ

「ひゃ、あ、あの、あえつと、くあwせd r f t g y ふじこ1p」

あ、やっぱいバグった

「あの、わらひ、ちよつと急用が…」

「えつとその、おだいじにね?」

その日斎賀玲は40・5度の高熱をだし学校を休んだ

「レイちゃん大丈夫かな? …まあ大丈夫だよ! おはよ!」

「陽務! やつと来たか!」

「なんだよ朝からテンション高えな、そんなにピアス穴拡張されたいのか？」

「なんで初手からそんな酷いことしようとするの!?!じゃなくて!昨日一緒に居た綺麗な人は誰なんだ!」

「昨日? ああアイツか: アイツ男ぞ?」

「え? あの男なの? まじ? だとしたら昨日デートしてたの?」

『ガタガタっ!』

なんかなんでみんな静かになったの? 怖っ!

「デートじゃねーし私のゲーム仲間だつてのチケツト貰う時にたまたま隣にいたから一緒に行っただけだよ」

「ほんとか!?!ほんとなのか! ほんとうなんだよな!?! その返答により俺たちの命が危ないんだ!」

「なんでだよ! なんで私が男友達と出かけるとお前ら死にかけるんだよ!」

「言えねえよ!」

「なんでだよ!」

「お願いだ! 彼氏を作らないでくれ!」

「なんでだよ!?! おいこら掴むな! 大丈夫! 今は彼氏なんて興味無いからア!」

「ほんとだな! ホントなんだな!」

「イヤアアアアアアア」

くくく5分後くくく

「さあ裁判を始めよう。言い訳はあるかい雑ピ軍曹」

「勘弁してください陽務裁判長」

「罪状はハイテンションに女子高生の体をつかみ至近距離から大声などを出しさりげなく女性の大切なものを触った罪だ」

「大切なものつて最後手を離す時に手がたまたま胸に当たっただけだろー!」

「いや割と胸に関してはどうでもいいんだが」

『どうでもいいんだ…』

「私の楽しみにしてたシユークリームを良くも落としてくれたな! 私はこれを重罪と考えピアス穴拡張の刑及び昼休みポエム朗読の刑に処すべきだと考えているが皆はどう思う」

『賛成』

「執行」

「今回は弁護人すらいらないの!?!嘘だ!やめろ!嫌だア!」

ふう今日もいい天気だ

お?メツセージ?



オйкаッツオ：楽羽ちゃん！急で申し訳ないんだが水曜日空いてないか!?

サンラク：お前がプライベートの時にこっちの垢に連絡するあたりゲーム関連か

オйкаッツオ：…空いているか？

サンラク：まあ休校日で暇ではあるな

オйкаッツオ：交通費とか出すし美味しいお店に連れて行ってあげるから顔隠しとしてゲームイベントに出てくれない？

サンラク：えー、なんのゲーム？

オйкаッツオ：GH：Cの特別試合

サンラク：どんな感じ？

オйкаッツオ：色々なプレイヤー参加する特殊マッチで5人でのバトルロワイヤル式になって最後に残った人達でトーナメントになるかな

サンラク：それならいいけどさ…

オйкаッツオ：ほんと!?!やった！なら大会が9時半から始まるから8時までにテレビユーガッタに来てくれる？

サンラク：!?!何また放送されるの!?!今回何するわけさ！

オйкаッツオ：コメンター兼プレイヤーってとこなんだけど本来の相方のメグが法事があったみたいで来れなくてさ…

サンラク：それはしやあないな、わかった。そろそろ授業だからまた後で

オイカツツオ：ありがとね！よろしく!!

ふう終わったかすぐに予定埋まったなさて授業に集中しよう！横に倒れている福耳

は見なかった事にして！

放課後家に帰ると笑顔の瑠美に土曜日丸々空けといてねと言われた：

なんでだろう嫌な予感がする：

私は気づかなかった：外道文房具から貰ったサイン入りCDに書かれていた言葉を

：

## ゲーマーの恋 楽羽×鯉6

遂に来てしまったTVユーガッタ！

2回目にして慣れた自分が怖いなあ…

てか顔に仮面被ってる人をスルーってそれでもいいのか警備員！

うわあ着いちやったまーた”顔隠し様”って書いてある…

うわあまーたライオットブラッドおいてある…

まじでガトリングドラム社は気のせいかな知らないけど若干外堀埋めてきてない？

カツツオ：そろそろ着いた？

うおっビックリしたタイミングいいなあ

流石リアルギヤルゲー主人公

サンラク：うん着いたぞよ、てか部屋にまたライオットブラッド置いてあるんだが

？

カツツオ：飲めってことじゃない？

サンラク：今はいいかな！せめて後で…

カツツオ：場所とか案内するから今から行っても良い？

サンラク：ああいいぞ〜

〜5分後〜

トントン

来たか「どぞぞ」

「お邪魔しマースつと、大丈夫？緊張とかしてる？」

「いや、前回の割と慣れたからなあ…てか見てくれよこれ！

「？なにそのマスク？」

「GGCで手に入れたマスクでさ！表情を絵文字として表示できる優れものなんだよ  
！」

カツツオにこのマスクの素晴らしさを語っているとアイツは事もあるうか顔を背けてやがる！

「へいへいカツツオ君よお、自分から説明求めておいたくせして、顔を背けて話を聞かないってどういう見だい（ゝωゝ）」

「近い近い近い！距離感バグってるよ！」

「てかまてお前なんか顔赤くないか？熱か？無理すんなよ？」

「だあもう！大丈夫だよ！早く行くよ！」

???意味がわからないが元氣そうだしいつか！

「すまん先行つててくれない？用意するものがあるんだよね」

「わかつたけど早く来いよ？」

さーて秘密兵器でも作りますかねえ（　ω　ω　）

~~~~~10分後~~~~~

「さーて！今回も始まりました！みなさーん見えています？チャンネルそのまま！テレビユーガツタから愛をこめて！笹原エイトのチャンネルエイト始まるよ！今回はコメントーター兼プレイヤーとして魚臣慧さんとスペシャルゲストのお2人に起こしいただいてます！どうぞ!!」

「どーもー、ご紹介に預かりました魚臣でーすじゃなくてエイトちゃんゲストの1人は俺が連れてきたけどもう1人誰なの？」

「それはお楽しみです！魚臣さん側のゲストさん！顔隠しさんです！」

「どうも顔隠しです」

「お久しぶりですね！今回のイベント緊張されていますか？」

「お久しぶりですm（\*　　）m前回と引き続き楽しみにしたので少しだけ緊張しますねw今回もガトリングドラマ社よりライオットブラッドを貰っています！皆さん飲んでねー」

「そろそろエイトちゃんもう一人のゲスト呼んだら？」

「それもそうですよねえ。ではスペシャルゲスト！今ティーンで話題の人気モデル！天音永遠さんです!!」

「(´ω´)ふあっ」

「? ( ⊠○○?○ ⊠)!!」

「みんな元気にしてるかな！みんなの天音永遠さんの登場だよ！」

「はい！それでは揃いましたのでゲームスタートです！」

~~~~チャットでの会話~~~~

サンラク：おい！カツツオ！どういうことだ！

オイカツツオ：俺も今知ったんだよ！どういうこと!?

ペンシルゴン：いやね？たまたま面白い話を聞き付けたしエイトちゃん脅し…お願いしてプロデューサーの方にお願ひしてもらったのさ！

サンラク：今絶対脅したって言ったよ

ペンシルゴン：ほおそんなにモデルの仕事したいと？

サンラク：辞めてくんない？瑠美が暴走する！

カツツオ：俺はちよつと見てみたいかも…

ペンシルゴン：ほら楽羽ちゃんカツツオ君もこういつてる事だしさ！

サンラク：ヤダよ！せめてお前ら2人も一緒なら考えてやる。てかカツツオ俺たちも

そろそろ試合だぞ！

カツツオ：そうだねサクサクツと敵を倒しますかねえ

~~~~~2時間後~~~~~

「今！顔隠し選手が最後の一撃を決め決勝戦へと駒を進めました！偶然にも決勝戦はゲストのお2人になりました！お2人は相手をどのように分析しますか？」

「はい、顔隠し選手はトリッキーな動きが多いのでカウンターなどを決めて行きたいかなと思っております」

「私は魚臣さんは基本的に受け重視の総受けカウンター野郎なので手数を多めに魔境スレに色々と流していきたいと考えています」

「おいコラちよつと待て今なんt「それでは決勝戦の準備お願いします！」最近エイトちゃん強くなつたね…」

じゃあ、こいつを飲んでからつと…

「？顔隠しさん何飲んだの？」

「シルヴィアと戦った時に飲んだ決戦仕様のライオットブラッド」

「はあ!?!ガチじゃん！」

「当たり前だろお前の前では出し惜しみはしない！」

「なら俺も全力で行かせてもらおうぞ！」

~~~~~20分後~~~~~

『天音さんはこの戦況をどうみますか?』

『私はそこまで詳しく言えないのですが、先程から顔隠し選手が防戦一方となり得意の機動力による攻撃などが仕掛けられていませんが私には虎視眈々と反撃の機会を伺っているようにも見えますね』

『おお!予想以上の返答をありがとうございます!と、急に顔隠し選手急に高層ビルへ逃げました!』

『どうした!顔隠し!!逃げてばっかじゃ決まらないぜ!』

『ほざいてろ!そんなに決めて欲しけりややってやる!擬似ウルト!』

『おっと!高層ビルから魚臣選手を掴んだ顔隠し選手が地面に叩きつけた!』

『くっそダメージが…!』

『オラオラどうした!さつきまでの威勢はどこいったのかな???逃げてばっかじゃ決まらないんだよ?』

『くっそ腹立つ!決めてやる!』

『正義の拳に沈め!』

『顔隠し君のキャラヴィランですが?!』



「お前は勝てば官軍という言葉を知らないのかね？」

『おつつと両者殴り合いを始めました！もはや早く残りのHPを削り切るかと、しているようです！』

『これは魚臣さんも顔隠しさんも両者攻撃力がほとんど変わらなからどれだけ素早く相手にダメージを与えるかが重要ですね』

『おつつつと！両選手クロスカウンターを決めたアアア！そして2人ともHPパー全損!!これは公平なジャッジにより勝敗が決まります！』

WINNER 顔隠し!!!

『決まりました！判定は顔隠し選手の勝利です！では今回のイベントは顔隠し選手の優勝で幕を閉じます！天音さんはどう思いましたか？』

『今回の勝負は最後の最後に幸運の女神：いやカフエインの神が顔隠し選手に微笑んだのでしよう。それが微笑まれなかったのが魚臣選手の敗因でしょうね』

『カフエインの神とかいう割と邪神っぽい神様は無視してお二人様最高の勝負をありがとうございました！それでは視聴者の皆さんありがとうございましたm（\*—ω—）m 次の動画で会いましょう！、（・▽・）バイバーイ』

くくく控え室にてくくく

うわっ夏にVRセットやったせいで汗酷いな…さすがに上だけ着替えるべきだなこりや…、（（（（ゴソゴソ

「やあ、楽羽ちゃんお疲れ様この後ペンシルゴンと3人でご飯に行こうって話g…」  
『……………』

『うわあああああああああ  
?!?!?!?』

「出ていけ!!」

「ごめんなさい!!!」

その後顔を赤く腫れた魚臣慧が天音永遠に煽られていたという…

## ゲーマーの恋 楽羽×鯉7

昨日は散々だったなあ…折角優勝して賞金とか手に入ったのにまさか最後の最後で、カツツオに着替えを覗かれるとは…

「賞金も手に入った事だしそろそろ夏物の服買いたいなあ…そう言えば瑠美に日曜日は開けておくように言われたような…ならペンシルゴンに土曜日に頼んで買物に付き合つて貰つて選んで貰おうかなあ…」

お、教室に着いたか

「お、陽務さんおはよー」

「おはよう暁ハート先生、今日のポエムは順調かい？」

うお！すげえ綺麗に膝から崩れ落ちたなあ

『すげえな流石陽務さん雑ピの対処法を熟知しているな！』

『流石お姉様！今日も美しいですわ！』

おいちよつと待て今なんか変なやついなかったか？

「今なら何にもしないから今お姉様と言つたやつ出てこーい」

『……………』

「このクラスは謎の闇に包まれている……！」

「はあしようがない、異端審問会の皆よ軍曹を処刑せよ」

『ハッ！了解しました総隊長殿！』

「なんでだ!?今回はもはや何もしていかない!何故だアアア!!」

ふう我が軍隊も統率が上手くいくようになっていいるな!我が守備に一切の隙なし!

さて今日も1日頑張るかなあ…

~~~~放課後~~~~

「楽羽さん!少しよろしいですか?」

「あ、レイちゃんやつほーどしたの?」

「ほみゅツツツ」

(あの天真爛漫な笑顔癒される…)クラスの心が1つになった瞬間

「あ、斎賀さんこんにちちはー今日は何しに来たの?」

「あ、暁ハート先生こんにちちは毎日ご苦労さまです」

『すげえめつちやナチュラルに心を抉った!』クラスの心が1つに…以下略

「でレイちゃん何しに来たの?何かあったの?」

「いえ、今度一緒にゲームをしたかったので面白いゲームを教えて欲しいなあと思ひまして

…」

「うーん今のところこれと言ってオススメ出来るのがないんだよねえ」

「…そうですね（・・ω・・）」

「だからさ、今度一緒にロックロールにゲームを見に行かないかな？」

「ほんとですか!?!なら今週末あたりでも…」

「ごめんね今週は空いてないから今度予定合わせて行こ？」

「（・・ω・・）」

「大丈夫？ 斎賀さん??」

…ニヤッ

「おいおい暁ハート先生よおなーに私の大親友のレイちゃんをしょんぼりさせているのかあい（・・ω・・）」

「ハッ！ 嫌な予感がする…戦略的撤退！」

「皆の者！ 戦術的確保オ！」

『うおおおおおおおお!!!』

「さあ魔女裁判を始めよう処刑に賛成の者よ手を挙げよ！」

『サッ！』 クラスの心が…以下略

「嫌だ！ こんな理不尽なのは！ 嫌だアアア！」

ふう処刑も済んだことだしアイツに連絡するかねえ…

楽羽：ペンシルゴンちよつといいか？

天音永遠：やつほー楽羽ちゃんどうしたの？プライベート垢に、珍しいねえ、てか永遠でいいんだよ？

楽羽：わかった永遠って呼ぶよ。本題に入るんだけど、今週の土曜日って空いてないかな？

天音永遠：一応空いてるけどどうしたの？

楽羽：いやさ、この間優勝して賞金手に入ったからさそろそろ夏物の服欲しいんだけど自分じゃよく分からないから永遠に手伝って欲しくてさいいかな？

天音永遠：なあんだそんなことかあ。それくらいいいよオ少し聞きたいこともあるしねえ、てかちようど土曜日のお昼頃カツツオ君が雑談配信するって知ってた？

楽羽：そうなの？なら一緒に見てみない？

天音永遠：おっ！いいねえそれえそうしよつか

楽羽：ところでさ映画に行った時の面白い写真いる？

天音永遠：いる！

こいつ返信無駄に早かったな…

楽羽：これだよ

天音永遠：(´ω´) ブッフオオオオオwwwwこれは向こう3ヶ月はイジれる！

楽羽：てか私も聞きたいんだけどさ、なんでレイ氏が私と話してるとみんな生暖かい目で見てるの？

天音永遠：あ、ごめん私ちよつと仕事入るからまた後でね！

楽羽：おいコラ逃げんなあ！

ちつ逃げられたか…まあいい土曜日に聞けば…

とりあえず瑠美にかかるーく服選んでもらいますかねえ…

## ゲーマーの恋 楽羽×鯉8

もう土曜日になったなあ…なんか今日は永遠が迎えに来てくれるらしいし瑠美に着替えお願いしようかなあ

「瑠美いお願いがあるんだけど〜」

「あ、おはようお姉ちゃんどしたの?」

「いやね?この後少ししたら永遠と買い物行くから服とかお願いしていい?」

「くあw背drftgyふじこ1p;@:」

やばい…壊れた…どうしたもんかねえ

~~~~5分後~~~~

「はっ!なんで急にこんなことに!?!事情説明はよ!」

「うおっ!?!急に復活すんなよ心臓に悪い…」

「事情説明はよお!」

「まあ一昨日服買いたいから付き合っって?っってお願ひしたらいいよって言っってくれたの

「や」



「はあ…そつか…もういいや…で、いつ頃に家出るの?」

「永遠の言つてた時間は大体30分後位にここに迎えに来てくれるんだってさw」

「急だなあ!ほんとに!なんでお姉ちゃんはこんなに急に言うのさ!もう!髪もボサボサだしパジャマのまんまだし!ほら!すぐ座る!まずは寝癖から!」

~~~~~15分後~~~~~

「ギリギリ完成した…よく頑張った私…」

「おおありがとちゃん瑠美」

「d (☒?☒\*) (お土産よろ…」

「何がいいの?」

「永遠様の写真がほしい…:(o|\_|) o パタツ」

「やっぱりこいつ邪教徒だなあ…」

「?メールが来たかな?」

「永遠:そろそろ着くよ」

「楽羽:りよーかーい外で待ってるよ」

「永遠:分かったよん」

「もう着くのかあなら出よつと」

「ガチャ」

「あ、おはよう楽羽ちゃん」

「おはよう永遠とところで聞きたいんだけど、なんで教えたことの無い私の家分かるの？」

「…楽羽ちゃん今日は一段と可愛いね溜美ちゃんにやって貰ったの？」

「おうコラ誤魔化し方が適当すぎんだろが、せめてもつとマトモな言い訳考えてこいや」

「(ノ≡ノ≡) ☆てかそんなに重要なこと？」

「そりゃそうだろ！お前にバレるとか変なのを送り付けそうだしさ」

「なんでそんなに信頼度低いわけ!？」

「自分の胸に手を当ててよく考えるんだ」

「うーん思い当たる節が8、9個くらいしか思い当たらない…」

「割とあるじゃねえか多分その中の一つだよ」

「この中で一番でかいのは前のオフ会の時に楽羽ちゃんのジンジャーエールにレモン果汁9個分入れるように店員さんをお願いしたことかな？」

「あんなにすっぱかったのとお前のせいだったんかい！くっそカツツオのせいかと思って魔境スレに写真あげちゃった…」

「すっごいとばつちりうけちゃってんじやあ〜んかわいそお(シ、▽、\*) ケラケラ」

その割にはくっそ笑顔だな…やっぱり外道じゃねえか

「そろそろ出発しようかねえ」

「今日はどこに行くんだ？」

「若者！女の子の聖地！渋谷に行くのさ！」

「はあ!?!マジで言ってるの？大丈夫かな？ドレスコード的に」

「楽羽ちゃんは渋谷をなんだと思ってるの？」

「リア充の聖地」

「正解」

「帰っていい？」

「だくめ？」

「（??）?（?）デスヨネ」

~~~~~30分後~~~~~

「着きました！若者の聖地！渋谷ア！」

「うわあ人が多いなあ…キラキラしてるう」

生気がア奪われるう

「じゃあそろそろ行こっか！（^ω^）」

「まって！あと少し待って！心の準備があああ！」

待ってくれえええええ

~~~~3時間後~~~~

— ∴ ∴ ∴ ∴ ∴ —

「あはははははは！楽羽ちゃんめっちゃグダってしてるう！」

「服はありがたいけどまじ覚えてろ…」

天音永遠のネームパワーで安く似合う服を買うことが出来たのだがずっと着せ替え人形にされていたせいでもう疲れた…

「そろそろカツツオ君の放送時間だから見よつか」

「そうだね見してくれる？」

『はい残念ながら始まってしまいました魚臣慧の質問コーナー』

『このコーナーでは100問の質問を適当に見て適当に答えていくコーナーです』

『どうせ魔境からの質問が多そうなので感情が死滅してまーす』

~~~~15分後~~~~

『次は25問目の質問です。好きなタイプ？珍しくまともだなあ。そうだなあ、ある程度元気があってゲームが得意で趣味に共感してくれる人かな？』

『次は26問目の質問ですねえ。えーと？顔隠しさんとなら付き合うことは出来ますか？それはねえ、うん付き合えるなら付き合いたいかなあ、趣味は同じで面白いし一緒に

いて飽きることがないしねえ』

『答えてくれてありがとうございましてBy鉛筆騎士』

『!?ちよつとまって！鉛筆騎士さん！もしかしてあの子も見てるの…?』

『YES?』

『ああああああああああ』

「ちよつと永遠！何聞いているのさ！」

「ええ特に何もお？（・▽・）ニヤニヤ」

「ちよ！どうするのさ！放送事故だよ!?うわあああ、どうしたらいいんだ…これから顔合わせる時どんな顔をすればいいのさあ…」

顔が赤いのが自分でもわかる…ああもう！

くくく魚臣sideくくく

放送終了後

「うわあああ見られてたとかありえない！油断した！ほんとに油断した！ああもう！どうしよう…次会った時どんな顔して会えばいいんだ…」

『なにがあってもペンシルゴンを許さない!』

## 男子高校生とモデル 楽郎×永遠

「はい！カットオ！これにて本日の撮影は終わりになります！皆さんお疲れ様でした！」

『お疲れ様でしたあ』

ふう、やっと終わった……私の名前は天音永遠、人気モデルをやっている、ゲームでは鉛筆騎士や、アーサーペンシルゴンと名乗って遊んでいる。普段は自分の性格を隠し、ゲーム内で解放してストレス発散等をしているおかげか、ゲーム内では外道と知られ、現実世界では裏表のない、屈託の無い性格の持ち主と思われる。

周りからはあまり悩みが無いと思われるが、現実世界だとそうでもない。ゲーム世界なら周りをさえすればどうとでもなるが、現実世界だとそうはいかない、現に今の時代もそうだ  
「やあ、お疲れ永遠ちゃん今日も可愛かったねえ」

そう、今の私の種が今話しかけてきた毒島康雄

彼は大手企業のプロデューサーで、社長の息子であり、仕事の才能もあるという人間だ、しかし黒い噂が絶えなくヤクザとも繋がっていて若いモデルやアイドルなどに手を

出しては権力で揉み消していると噂が絶えない男である

「今日は暇？もし予定が無いようなら2人で呑みにでも行かない？」

「ごめんなさい今日はちよつと予定がありまして…」

「えー前日もそうやって言つてたジャンもしかして俺と呑むのが嫌とか？」

「いえいえ、そういう訳ではなく私自身が酒癖が良くなく、あまり人と飲めないんですよ

…ごめんなさい」

「大丈夫だよお2人なら迷惑つてこともないしさあ、ね？だから飲みにいかない？」

「ごめんなさいまた今度お願いします、失礼します」

「あ、ちよつと待つてよ〜永遠ちや〜ん」

やつと逃げきれたかなあ…あの人しつこいし何故か1ヶ月くらい仕事がほとんど一

緒つてなんなの？絶対圧力かなにか掛けてるでしょ…

「明日は久しぶりのオフだしゆっくり実家の近くでも散策しますかねえ…」

〜〜〜次の日〜〜〜

「ふうやつぱりあんまり変わらないなあ…」

もう1時過ぎかあ…久々の散策は楽しかったけど流石にちよつとお腹すいてきた

なあ 久々にラーメンでも行きますか！

「いらつしやつせえ！おひとり様で？」

「はーい！空いてますか？」

「空いてはいますが、今大変混みあっております、もしかしたら相席をお願いする可能性も、ありますがよろしいでしょうか？」

「大丈夫ですよ！注文が、味噌ラーメンの大盛り麺硬め油ニンニクマシマシチャーシューコーン煮卵トッピングで！」

「あいよお！」

~~~~~2分後~~~~~

『やつほーおっちゃん！今空いてるかな？』

『おう、坊主最近来ないから別のところに浮気してんのかと思っただけ、相席になるけどいいか？』

『ああ構わないぜ？』

『おうならちよつと待ってろ』

『お客様相席をよろしいでしょうか？』

『構いませんよオ』

『ありがとうございます！コチラになりますお客様！』

『失礼しまさ…ペンシルゴン？』

『え!?!サンラク君!?!なんでここに!?!』



「いや俺はここが地元だし、おっちゃん味噌ラーメンの大盛り麺硬め油ニンニクマシマシチャーシューコーン煮卵トッピングよろしく」

「私と同じで注文しやがった…」

「まじかwww」

サンラク君は割と悩み無さそうだしいいなあ誰も私の悩み気がついてくれないしなあ…

「ところでさペンシルゴンや」

「なんだあい」

「なんでそんなしんどそうな顔してんの？なんか悩みでもあるのか？」

「え？そんなに分かりやすく顔に出てたかな私？」

「いや、出てはなかったけどなんか思い詰めた様な顔してたから」

「…そつかあならお姉さんの話を少しだけ聞いてくれるかな？」

「やだ」

「は!!これ今絶対聞く流れだったでしょ!!さすがに酷すぎませんかねえ!!」

「そんな真剣な話するならもつと静かな方が良いだろ？先に飯だ飯そろそろ来るぞ」

「納得いかない…」

~~~~~30分後~~~~~

「どうだペンシルゴン美味かったろ？」

「ホントそうだねえ久々に食べるラーメンは格別だったなあ」

「そんじやうちに行くか」

「ほわあ!?!は、え?うーん?は?ちよつと待って?どうゆうこと?」

「おーペンシルゴンが驚いてんのを見るのは久しぶりで面白いなwwww」

「いやどうでもいいから!?!なんで急にサンラク君の家に行くことになってるのさ!?!」

「いや割と重要そうだしどこか近くで落ち着けて静かなところって言ったらうちくらい

しか思いつかなかったんだよしよがないね」

「はあ、サンラク君はモデルを家に連れ込んで万が一にでも写真撮られたらどうなるか

わかってんの?」

「別に俺らはそういう関係でもないし大丈夫だよ、それくらい信頼しろ」

「りよーかい案内よろしくね」

「はいよお」

~~~~~15分後~~~~~

「うーわほんとにウチから近いんだねサンラク君家」

「?そうなのか?お前の家はここからどれくらい?」

「大体30分くらいかな?」

「近すぎやろ！今度菓子折りもって行ってこよ…」

「別に行ってもいいけどその話聞いたらどうなるか分かってるよね？」

「社会的に殺されそうだからやめとこつと、じゃいらつしやいませえー」

「お兄ちゃん誰か来たの？」

「あ、初めまして？瑠美ちゃん」

「キュー、ボタン」

「ああだろうと思った…」

「え？なんで？最早訳が分からないよ…」

「前にも説明した通りお前のファンでさ倒れるか発狂するかかの2択だったんだよねえ運んどくから少し待つといてくれや」

「りよ、了解…」

『うーんゲーム仲間だとはいえ男の人の家にプライベートで来たのいつだっけ？謎の緊張感がムズムズするなあ』

「おーいこつちは大丈夫だからそろそろ部屋に行くぞー」

「りよ〜か〜い」

「お前がそうなるのは珍しいから今のうちに全部吐き出しとけ」

「サンラク君、ごめんねそしてありがとう。それじゃあ私の最近の悩みを聞いてくれる

かな?」

~~~~~30分後~~~~~

「つて事が1ヶ月くらい続いてどこで手に入れたのかプライベートアカウントにまで連絡してきてるんだよね…」

「うーんこれはちよつと不味いやつかもな…とりあえず俺の説明する手順通りに動いてもらえるか?」

「わかったやつてみる」

~~~~~更に15分後~~~~~

「了解これでどうにかなるかな?」

「まあこつちも動いてみるからさ。また近いうちに話をしよう」

「うん、なら4日後辺りはどう?」

「ちようど空いてるからその日にしよう」

「ねえサンラク君」

「?どうしたよペンシルゴン」

「なんでサンラク君は私を助けてくれるの?いつも嫌がらせしかしてないのに」

「まあな、お前からの嫌がらせは高頻度でイラつくけど自分の身内が迷惑を被ってんだやり返してやるのが礼儀ってもんだろ」

『ああもうなんでそんなにカッコイイことを言うのかなあ君は…不覚にもドキツとしちやつたじゃないか…よし！私もへこたれてる場合じゃないな！』

「ありがとうサンラク君、君のおかげで元氣が出たよ！とりあえず手筈通りに動くよ」

「やつと笑顔が戻ってきたみたいだな」

「そう？まあいいかねえ、そうだサンラク君や、プライベートの時くらいは永遠って呼んでよ」

「りよーかいならそつちも楽郎って呼んでくれ」

「分かったよんとりあえず4日後にまた」

「おう4日後に」

~~~~~  
??side??

「クソ！なんであの女は僕の物にならないんだよ！折角会社とかにも手を回してんのによ！まだアレを使うには早いな…さて次はどうするか…」

## 男子高校生とモデル 楽郎×永遠2

「よし！今日も仕事頑張りますか！」

今日からは楽郎君に言われた通りに動いてみるかなあ…

「おはようございま〜つす」

「天音さんおはよう、あれ？なんかいつもより機嫌が良さそうだね、昨日何かあったの？」

「およ？そんなに顔に出てかな？うーん緩みすぎたのかな？引き締めなければなあ…」

「お、永遠ちゃんおはよう〜今日も一段と可愛いねえ」

「プロデューサーおはようございます、私準備があるので失礼します。」

「えーちよつと待つてよー今日撮影終わった後飲みに行こーよー」

「ごめんなさい、この間も説明した様に私はプライベートで2人で飲みに行くなどはあまりしない様になっているので」

「なら今回の撮影メンバーを誘うからさどうよ」

「これは多分逃げれないな…」

「わかりました、でも予定があるので1時間ほどしかいられないですがそれでもよろし

ければ」

「決定ね！みんなを誘つとくから」

「はあ、一応楽郎君に連絡して迎えに来て貰えないか頼んどくかな…」

「……5時間後……」

「お疲れ様でした！では居酒屋に移動しましょう!!」

『おおお！』

「はあ、しんどいなあ」

「永遠ちゃんは俺の横ね」

「なんで私が強制的にお前の横なんだよ、…！」

「分かりましたー（諦）」

「……50分後……」

「でさでさ永遠ちゃんこの時の買い物があつたおかげで…」

「（なんで私がお前の彼女遍歴を聞かなきゃいけないんだよ！）そうなんですか？すつごいモテるじゃないですか！」

「いやあ照れるなあどうかな？永遠ちゃんも俺の毒牙にかかつてみない？」

「自分で毒牙って言うてるじゃん…てかさりげなく腰を抱くのをやめて欲しい」

「すみませ〜ん、私はまだ仕事とかを楽しみたいのでそういうことは考えてないんです」

よオ、つともう時間かあ楽しい時間をありがとうございました。そろそろ私は帰りますね?」

「えーもうちよつと飲んでこうよ」

「すいません、友達に迎え来てもらってるんで行かなきゃなんですよお」

「そんなのどうだっていいじゃんかさ」なんだつたら連れてきて一緒に飲めばいいよお、まあその子が余程嫌がれば帰ってもいいけどさ」

「はあわかりました、なら少しお待ちください」

『楽郎君さつき呼んだのに申し訳ないんだけどさ今から言う居酒屋に来てくれない?』

~~~~~15分後~~~~~

「あ、いたいたどうしたんだ?」

「やつと来たね楽郎くん待ちわびたよ!」

「彼が永遠ちゃんのお迎え? 未成年っぽく見えるけど…?」

「ああ俺は未成年ツスよ。永遠とは昔っからの仲で家も近いし良くゲームとかしてたんですよ、永遠が引越して一人暮らしするまでは一緒だったけどそれでも一緒にゲームをやつてこの間久々に来たから悩み相談聞いてたんすよ」

「へえ、そんなに仲が良いんだ」

「貴方があの毒島プロデューサーですよね? 貴方の噂はかねがね」



「おお！俺のことも言つてたのかな？」

「はい、永遠が珍しく完璧な人間と言つてたので驚きましたよ」

「いやいや照れるなあ」

「俺もそんな恵まれた人間がいるのかと感心して今見たらまんま話通りつて感じですねえ」

「いやあホントに照れるなあ！」

『すげえ皮肉言つてるのに全然気づいてないなあてか楽郎君分かりやすスギイ』

「とりあえず永遠は連れて帰るんで、それでは」

「えー待つてよ、子供の君には分からないだろうけどこれは大人の付き合いなんだから一人だけが帰るとかは出来ないんだよ。だから諦めて一人で帰つてくれない？」

「あれ？おかしいなあ永遠はなんでもしつこく誘われるから行つて、それも一時間ほどしか居られないと言つてしていると聞いたのですが？」

「それを言われると痛いしなあじゃあプロデューサー権限で残るように！」

「それ職権乱用及びパワハラですよ？それに永遠はアルコールを飲むのが苦手と言つていたのにそれでも残らせて飲ませようとするのはアルハラですよ？」

「い、いやそれは…」

「反論がないならいいですよ？行くぞ永遠」

「え？あ、うん。失礼しまーす」

~~~~~5分後~~~~~

「あははははははははははほんつとに最高だよ楽郎君!!!」

「そんなに笑うところか？」

「そうだよおwwwアイツは実力も権力も強いからねえ」

「てか調べて見てわかつたんだがアイツの噂ほとんど真実みたいだぞ」

「そうなの!?てか、なんで知ってるの？」

「カツツオに協力してもらって調べてもらった」

「そうなの？で、代償は？」

「今度の大会参加」

「p(▽▽)q ファイトオ〜♪」

「おう、てかこのまま俺の家に行くぞ」

「りよーかい」

~~~~~20分後~~~~~

「我が家へ到着！」

「Hey永遠ちゃんやここはお前の家ではなく陽務家なのですか？」

「楽郎君は私のモノ！」

「言い方がおかしいだろ」

「まあいいや早く上がって」

「俺の家なんですか？」

「いーのいーの」

「はあなら話をするかな」

「その前に楽郎君」

「？」

「今日は色々ありがとう」

「特に何もしてないぞ？迎え程度だろ」

「それでもだよ。充分かつこよかったよ」

「私はもうそろそろ認めなければならぬのかもしれないかもしれない」

「そうか？ならよかった。」

「7歳も年の差があつて相手はまだ普通の高校生だけど」

「しつかりとカツツオにも感謝しとけよな」

「私は自分の心に正直になり始めなきや」

「ねえ楽郎君」

「？なんだよ急に」

ちゆ

「私さ君の事が好きになってきてるみたいなのさあだから少しずつアタックしてくからよろしく！今日はもうバイバイ！」

「は!? え! ちよつと!」

さあて! 心機一転頑張りますかね!

## 男子高校生とモデル 楽郎×永遠3

~~~~魚臣慧side~~~~

数日前サンラク：陽務楽郎という少年から連絡が来た

彼は昔からのゲーム仲間であと1人を合わせた3人でシャンフロをやるなど割と仲は良く、リアルでも顔を合わせることもあり信頼しあう仲だ

だからこそあのペンシルゴンの状態を聞いて正直異常事態だと思った。

あのペンシルゴンが何も出来ないでいる状況が想像出来なかったからだ

ゲームの程では無いにしろ策略を巡らせることなんてペンシルゴンなら簡単なはずだが余程難しい相手か、バックにヤバイやつらがいるかの2択ではないかというのが俺と楽郎の考えだった。

幸い楽郎はペンシルゴンの実家の近くに住んでいるのである程度は動けるのでそこらは頼み、こっちは探偵でも雇って調べてみるとまさかの真っ黒、探偵の人にはなぜここまで隠せてきたのが不思議と言われるくらいだった。奴はヤクザがバックに付いているのがいい事にクスリの売買や、女性へのセクハラや売れないモデルやアイドルへの

枕営業の強要、付き合わないと仕事を減らすなどの嫌がらせをしていたようだ。

さて、俺たちの大切な仲間に出したクソ野郎にどうやって仕返しをするかゆつくり考えるところかねえ

~~~~5分後~~~~

『カツツオ助けて。永遠に告白されてキスされたんだけどどうしたらいい?』

「人がカツコよくモノローグ決めてるのに急に面白い上に究極に気になる発言するのやめてもらえますう?」

『は?そんなこと言われましたも…で、どうしたらいい?』

「ラブクロックでもしてきたら?」

『ピザ留学やめろ。俺はお前みたいなりアルギアルプレイヤーの意見が聞きたいんだよ』

「君はいちいち人を煽らないとダメな病気にかかっているの?」

『?お前は呼吸をしなくても生きていけるのか?』

「俺を煽るのがまさかの生命維持活動だった!」

『まあそんなとこだなあでどうしたらいいかな?』

「まあ言いたいことは山ほどあるけど一旦今の奴が終わるまでは待ったら?」

『そうだよなあ…』

「てか楽郎はペンシルゴンのことをどう思ってるの？」

『どうってそりや…嫌いではない…ぞ?』

「なら好きなの?」

『いや、それはてかそんなことより調べた結果どうだったんだよ!』

露骨に話題変えやがった…

「まあいいか、驚くレベルで真つ黒だよ。現職の方もよく隠せてたなつてさ」

『マジかよ詳細説明よろ』

「というか3人で話し合うぞいつ頃空いてる?」

『明後日なら空いてるはず…だからいつも通りの居酒屋で』

「りよーかい」

くくく毒島sideくくく

「クソがア!」

俺は完璧な人間なんだ!金、地位、名誉全てが揃っている!俺のような完璧な存在にはみんな従うべきはずなのに!

今まで欲しいものは何でも使って手に入れてきた、金や地位、僕の地位で足りなければ親の力を使って、それでも無理ならバックのヤクザを使ったり小遣い稼ぎに使うクスリも使った…

何がなんでも手に入れたい…俺に手に入らないものは存在しない！存在してはいけないんだ！

~~~~永遠side~~~~

ああああああああああ!!!

やつちやつたやつちやつたやつてしまったアアアアアアアア!

「なあ永遠急に呼び出したと思つたらなんなんだ」

「いやあごめんね百ちゃん、ちよつと色々あつてねえ」

「?なにがあつたんだ?」

「男子高校生にキスして告白した」

「あー今ならまだ間に合うから一緒に警察行こ?」

「なんでさ!?!」

「どつからどう考えても事案だろ」

「酷くない!?!」

「逆に普通の男子高校生が人気モデルと付き合えると思うの?家族に読モがいるとか謎の有名ゲーマーとかなら話が違うけどさ」

「……………大丈夫、いけるいける」

「マジかよ…てか誰なの?私の知り合い?」



「あーえつとですね…ウチのクランのサンラク君に…」

「(☒?☒) ( ) ファア… (☒?☒) ( ) ファア」

「(ノミ?ミ) ☆」

「まあ…そのなんだ…がんば」

「…うん／／／／／」

「…楽郎side…」

「……………」

「ポケー (☒) (☒) ( )」

「おにーちやーんそろそろお昼だよーって何してんの?」

「何ってそりや光合成に決まってるんだろ」

「人間は光合成出来ないよ」

「?何言ってるんだ?」

「何それ私が非常識みたいな感じで話し進めようとするのやめてくんない?」

「なら母さんに聞いてみるよ」

「おかあさーん人間って光合成できないに決まってるよねー?」

『出来るに決まってるでしょ』

「もうやだこの家族!」

## 男子高校生とモデル 楽郎×永遠4

~~~~~居酒屋内にて~~~~~

「あ！高校生にキスして告白したペンシルゴンの姉御おチーつす！www」

「うがあ！なんで知ってるのさ！なんで言っちゃうのさ！恥ずかしよ!?でもしようがないじゃん！好きなんだからさあ！」

「は！どうだかねえ、悔しかったら楽郎の好きなところを一から説明してみなよ！」

「いいよ分かった！言ってやろうじゃん！覚悟することだね！楽郎君の好きなところを1から100まで全部言ってやる！」

「おい待てやめろお！待ってくれ永遠！それ全部流れ弾どころか全部銃弾俺に直撃してるから！恥ずか死しちゃうから！てかクソ鯉この野郎！お前煽ってんじゃねえよ！」

「えゝ何言ってるか分からないなあ（ ^ ω ^ ）」

「こうなつたら！」

「そもそも面白いネタを持ってきたら煽らなきやいけな「お前の寝顔を魔境に投稿する」ごめんなさい」

「とりあえず毒島のことを纏めていかないか？」

「そうだな、なら永遠からよろしく」

「うんりよーかい、私は事務所に圧力を掛けられてここ2ヶ月くらい仕事を一緒にやらされて、毎回のごとく2人で飲みに誘われるねえ」

「俺の方は探偵雇って調べてみたんだけどアイツの噂が全部本物つてことが判明したんだよねえ」

「は!?!マジで言ってるのか!?!だとしたらクスリとかヤクザとかも本当つてことなのか?」

「ああ、探偵の人曰く『良くここまで隠し通せたなあ…』とまで言われてたかなあ…」

「マジかよだとしたら俺たちだけの問題で終わらせる訳には行かなくなってきたなあ…」

「あ、そうだ言うの忘れてた、私2人が出る予定のゲーム大会の実況役に就任しました？」

★\*。」

『はあ!?!どういうこと!?!』

「ドン引きするくらい2人の息が合ったね…いやね、私が前にVRゲームが好きって言っちゃったんだよね…そしたら毒島が手配しちやつてさ本人も特別実況役になつてる」

「マジかよwwwある意味最高じゃねえかwww」

「それいつ気がついたの?」

「この間撮影終わった時めっちゃハイテンションで言われたんだけどホントはその日フリーだからゲームしようと思ってたのに殺意湧いたよね」

「ざまあwww」

「おいそのメダカ野郎ふざけんな」

「魔境ネタは勘弁してもらえますか?それされると毎秒SAN値チエックしなきゃならなくなるんでえ!」

「てかカツツオ君のことはどうでもいいけど少しお花摘みに行つてくるね」

「おう、気をつけるよ、てか慧にお願いあるんだけどさこのギガ盛り唐揚げセット頼んでいいかな?」

「今回一番頑張ったのは俺なのに扱い雑じゃね?あとせめて食べ切れる量にしてください」

~~~~5分後~~~~

「まさか居酒屋で足がつるなんて思いもよらなかつた…」

「なんか嫌な予感がするなあと思つたらビキリと来ましたよ…塩分とか取るべきなのかな…(ω、) トホホ…」

「あれえ？永遠ちゃんじゃん！」

「げ、毒島さんじゃないですかアどうしてここに？」

「いやあなんとなく1人で飲みたい気分だったからさあw永遠ちゃんも一緒にどうよ  
2人で飲もうよ〜」

「あ〜ごめんなさい今日は友達と来てるんでえ」

「えーいーじゃんか〜前も途中で帰っちゃったしね、別に友達に関してはまた来ればい  
いじゃ〜ん」

「そういう訳には…」

「おーい永遠まだかく、ギガ盛り唐揚げが来たぞ〜ってあら？…永遠ちゃんちよつと  
こつち来て」

『マジで言ってるのかよ!?!なんで毒島がいるのさ!』

『私だって知らないよ!なんかアイツ私の行く先々に居るからワンチャンスストーリーカー説  
があるんだよ…』

「君って確か楽郎君だったかな?ごめんねえ永遠ちゃんは僕と飲むから貰ってくよん〜  
♪」

「はあ、まず大前提として永遠は物じゃないし俺のものでもないから貰うとか以前の問  
題だし永遠がそっちに行くかどうかはあんたが決めることじゃない」

「へ、へえ楽郎君って元気がいいんだねえ。でも気をつけなよ？最近の大人は怖いからさ」

「ああ例えば権力使って女性に手を出したりクスリの売買してたりそれでも手に入らなければヤクザに頼ったりする人が」

「……お前それをどこ知った」

「ムキになんないでくださいよオタダの例え話ですから（　ω　）それとも、思い当たる節でもあるんですか？」

「チツ…なに？じゃあそいつと一緒にいる永遠ちゃんもそっちサイドな訳？」

「はい、私は友達という方が楽しいので」

「はあ、君はもつと賢い人間だと思ってたんだけどな」

「私は貴方を少し力に溺れてるだけの人間だと思ってましたよ」

「クソ、興がさめた」

スタスタスタ…

「ふう頑張ったぜ！」

「なんであんな無茶したのさ！下手すりやなにかされるかもしれないんだよ!？」

「いやあ流石にマズいと思っただしさあ」

「でも危ないでしょ！」

「それに永遠が危ないかもしれないと思ったら体が動いてたんだよ」

「…楽郎君ってそんなに私を惚れさせて楽しい？」

「お？好感度が上がった感じ？ラブクロックやりこんだかいがあったぜ？★\*。」

『ピザ留学！』

「あれ？慧じゃんどしたの？」

「いやあんなに騒いでたらこっちまでに聞こえたよ…迷惑だから出るぞ」

「えーギガ盛り唐揚げセツトは」

「私のカニ盛り鍋は」

「君たち二人が騒いだから無くなったんですが!？」

「なら再来週の大会終わったあと打ち上げ奢りでよろ」

「よろ」

「ちくしよう！踏んだり蹴ったりだ！」

~~~~~個人チャットにて~~~~~

「例の計画は本人がいるみたいだしその場でやるぞ」

「了解」

## 男子高校生とモデル 楽郎×永遠5

居酒屋での事件が起きてから約9日、毒島があそこまで言うからには何らかの襲撃があるのかと思っていたが一切俺の周りで何か変わったことは無かった。一応慧や永遠、家族にも聞いたが周りに何か変わったことは無いという。ああさつき変わったことは無いって言ったけどアレは嘘だ！最近変わったことは毎朝…

「ら、楽郎君！おはようございます！」

「ああ玲さんおはよう。最近よく会うねえ」

「ひや、ひやい！偶然ですね！」

そう、先週の月曜日から玲さんと登校するようになっていたのだ！

何故かって？俺も知らん。朝起きたら連絡来て一緒に登校しないかと連絡が来てたから断る理由も無いし一緒に登校している。

ちなみにこれを永遠に話したら何故か拗ねて、慧に話したら何故か無言でギャルゲを勧められ、瑠美に話したら無言でピンタされた…なぜ（∩、≡\*。―。） why  
「おいそのガキ少し話があるからよツラ貸せや」

お、遂に来たかでもまあどうにかなるかね



「道に迷ってしまったんですね！」

『は？』

「では案内するので来てください！ 楽郎君少し案内してくるので先に行っておいてください」

「アツハイ」

「ではこちらです！」

「いや、ちよつと待つて用があるのは嬢ちゃんじゃなくてそつちのガキ…まつて力強すぎない？ 待つて！ せめて襟を掴むのはやめ、ちよ」

…なんでだろう触れてはいけないような気がするから見なかつたことにしよう…

くくく 昼休みくくく

『陽務楽郎君、陽務楽郎君至急校長室に来てください』

「お？ 楽郎なんかやらかしたのかく」

はあ…パチン！

『お呼びでしょうか！ 隊長！』

「私が戻るまでにその雑ピにピアス穴拡張の刑を執行しておけ」

『はっ！』

「おいちよつと待つて!! 今回ばかりは納得がいかないぞ！ 俺が何したんだ！ てかいつの間

にクラスに軍隊ができてるんだよオ！」

『ではいこう』

「嫌だアアアアア!!」

さて、さっさと行つてくるかねえ

~~~~~校長室~~~~~

「さて陽務君、君はなぜここに呼ばれたのか分かつてるかね？」

「いいえ、特に思い当たる節がありません」

「そうか、昨日匿名で君が深夜に居酒屋で大騒ぎをしていたと通報が入った」

「深夜？確かに僕はこの間居酒屋に行きましたが友人と晩御飯を食べに行っていただけです。確かに多少騒いでもしまいましたがその後すぐに店を出ました」

「そうか、まあそれでも通報があったのには変わりはないし飲酒をしていたというのも聞いた」

「それはしていません、ツレが飲んでいましたが僕は飲んでません」

「まあ処遇に関しては無期限の停学だ」

「!?なんでですか!?!」

「確証は取れてないにせよ学校外で騒いで、飲酒をしている疑惑を持たれている者を学校に置いておくことは出来ん」

「それでも流石に横暴です！」

「くだい！それ以上なにか言うようならより重くするぞ！」

「…わかりました」

~~~~5分後~~~~

プルルルル

「はい」

『校長先生かい？』

「ああ毒島さんでしたか、お約束通りあのガキを無期限の停学にすることが出来ました」  
『停学？私は退学にするように言ったはずだが？』

「すいません…決定的な証拠がなかったため流石に退学には出来ず、停学が手一杯でした。しかし、無期限の停学であればあといくつかの不祥事があれば退学に出来ます！」

『なら近いうちにやっておこう』

「はい！あの…約束の物なのですが…」

『ああ金なら今日中に口座に振り込んでおこう』

「ありがとうございます!!」

『次も期待してるよ…』

~~~~教室~~~~

「…おかえり楽郎」

「おー瀕死じゃねえか何があった」

「お前のせいですが!?!あの後詩の朗読大会まで始まったんだぞ!」

「どんまい、てか俺帰るわ」

「は?お前がサボリ?珍しいな」

「いや、停学食らったから帰るだけ」

「は!?!なんで?」

「いやね?この間友達と居酒屋で飯食ってただけど、少し騒がしくしちゃったからすぐ出たんだよ。でも校長曰く深夜に居酒屋で飲酒して大騒ぎをしてたんだと、お前ら気をつけろよ」校長にとって深夜は7時以降らしいから」

「え?マジで停学?」

「マジもマジ」

『やべえ斎賀さんが荒れる…』(珍しくまとまるクラスの心)

「楽郎!なんでそこで諦めちゃうんだよ!」

「そうよ!陽務君!諦めないで!諦めなければ大抵の事はなんとでもなるのよ!」

「お前ならどうとでも出来る!俺たちだって手伝う!だから諦めないでくれ!」

『そうだ!諦めるな!諦めないでくれ!』

ええ何この一体感すごい怖い：でもなんでだろうみんな俺の為にやってくれるような：例えるなら猛獣を抑えることが出来ないからそれを抑えられる人材を逃したくないかのような感じ：

「みんなのそれはありがたいんだけどさ校長にこれ以上騒ぐなら退学にするって言われているから家で大人しくしてるよ」

『あ、終わった』クラスの心が以下略：

この後2つのクラスから職員室への抗議があつたとか無かつたとか

くくくチャットにてくくく

サンラク：本日無事無期停学食らいました！

オイカツツオ：は？

ペンシルゴン：は？

オイカツツオ：え？急になんで？

サンラク：この間の居酒屋での1件が誇張されまくって伝えられて停学くらった。多分毒島だろうなあ

ペンシルゴン：嘘でしょ：

オイカツツオ：あいつならやりかねないでしょ

サンラク：いやまあ今回はしょうがない、とりあえず今週末に始まるゲームの練習で

もしますかねえ

オイカツツオ：了解ならさっさとやるぞ

~~~~1時間後~~~~

オイカツツオ：おいコラ出てこい脱獄犯

ペンシルゴン：え、待って何があつた？

サンラク：あ、救助遅れてすいませんでした。wwww

ペンシルゴン：あーなんとなく理解してきた

オイカツツオ：コイツ週末の大会のためにタツグバトルしてるのに一切俺の事を考え

ずウルトぶつばなしやがった！

サンラク：いやいや、死んだわけじゃあるまいし

オイカツツオ：いやそれが原因で死にましたが!?

サンラク：あれえ？プロゲーマーさん弱すぎ？

オイカツツオ：よーしわかった！とりあえず便Pに來いや！

サンラク：やってやろうじゃねえか！

ペンシルゴン：この2人ほんとに大丈夫かな…

~~~~大会当日~~~~

『さあ！やってまいりました！GHCタツグバトル！今回の司会はこの私、笹原エイト

とこの御二方!』

『やつほー!みんな見てるかな!?今回は司会としての参加、天音永遠だよ!』

『お久しぶりという方より初めましての方が確実に多いですがこんにはち毒島です。大抵はプロデューサーしてます』

『はい!というわけで司会進行、解説はこの3人でやっていきマース!』

一方その頃…

「なあカツツオ君や」

「…なんだい顔隠し君」

「なんで俺が大会に参加する度にライオットブラッドが山積みになって置いてあるのかな?」

「…分からない。まああれだよ伝説のライオットブラッドマジックってやつだよ」

「初耳だわ!てかなんでリボルブランタンすらあるの!?まだ日本未発売だよね!」

「マジで謎だよね…まあ集中して頑張るかあ」

「マジで納得いかねえ…」

~~~~~4時間後~~~~~

『さあ!遂にGH—C決勝戦ファイナルラウンドも大詰め!シルヴィアさんとアメリカさんのアルティメットタッグに対して魚臣選手と顔隠し選手の最強コンビ!一瞬の間

も許さぬ大激戦！お2人はどう思います？』

『アメリカ選手のチームは最高効率で攻撃し楽しんでいるイメージですね。対して魚臣選手のチームは効率度外視で楽しむことを前提にしているように思えますあ、顔隠し選手魚臣選手の足首掴んでぶん投げた!』

『アハハハハハハ！あの二人楽しんでる！めっちゃ楽しそう!』

『およ？天音さん随分と笑顔ですね？まるで、どちらが勝つか既にわかってるかのよう』

『ん〜そうだねえ、あの二人の顔見てみなよ。片方見えないけどすっごい笑顔でしょ？見てみなそろそろ本領発揮で一気に詰めてくよ』

『え？それはどういう…』

『エイトちゃん！実況しなきゃ！早く!』

『え?!魚臣選手と顔隠し選手急に怒涛の勢いでアメリカ選手、シルヴィア選手を、追い詰めていく!そして遂に…決まったア!25分32秒!魚臣選手と顔隠し選手のダブルアタックにて勝利!今回のGHCタッグバトル大会優勝は魚臣選手、顔隠し選手のコンプビです!それでは優勝者インタビュへと参りましょう!』

~~~~~15分後~~~~~

「それでは、優勝者インタビュです!まずは魚臣さん、感想をお願いします!」



「あ、はいとりあえず顔隠しに関して顔は晒すかゲームでフルボッコの刑のどちらかを執行したいと思いまゝす」

「おいコラ総受け野郎！ シャレになつてねえよ！」

「まああのバカを放つておいて「おいコラ！」 インタビューの続きでもしましょう」

「あ、顔隠しさんはスルーの方向なんですわ分かりました！ 今回のスタイルですがいつもの魚臣さんのカウンターのスタイルではなく積極的に攻撃をするスタイルにしたのですか？」

「はい、それについては顔隠しと綿密に話し合つて「拒否権を認められず強制的に決められただけでーす」…綿密に！ 話し合つて、この大会は勝つための戦いではなく楽しむための戦いをしようと思つたんですよ！」

「顔隠しさんほんとですか？」

「あれの反応見たら分かるやろ？ そういうことだ」

「えー2人の以心伝心具合が凄いですねえ…もしや相思相愛？」

『やめろお！ 魔境でやばいことになるだろうが！』

「あ、スタッフさんどうしたんですか？ え、まじ？…えーつとお2人に御報告が…」

「どうしたんです？」

「魔境…手遅れだそうです…」

すん（ハイライトが一気に消えた音）

「え、やばどうしょ…」

「…その事は後にしておいておいて、えー皆さんにご報告があります」

「顔隠しさんとの結婚報告ですか？」

「俺たちは男なのでありえません」

「性別が違えばいけたと？」

『マジでやめろ』

「えーつと話はそれましたが皆様に見て欲しいものがあります」

「今からここにいる報道関係各社の皆様はこの資料や動画などを送りますので見てくだ

さい」

ピロリン…ピロリンピロリンピロリン

ざわざわざわざわ…

『おい！今すぐ社に戻って夕刊を差し替えてこい！』

『早くプロデューサーに伝えろ！今すぐ速報で流せと！』

「ええつと？顔隠しさんは一体何を送られたのですか？」

「ならこちらをどうぞ…」

この周囲のマスコミのざわめきの理由それは前に慧が集めた毒島の黒い情報の数々

だ、前に大会でのことを打診された段階でこの状態での暴露を考えていた：俺みたいな一般人が何をやってもこの資料は報道される前に握りつぶされる、ならどうすればいいか。大会で優勝してインタビュースタッフにきた報道陣に直接渡すという手段だった：

「なあ慧そろそろアイツ来るんじゃない？」

「だろうな、あ、エイトちゃんちよつと多分ゲストが来るから撮影はそのままよろしく」

「アツハイ（諦め）」

~~~~5分後~~~~

「おい！糞ガキ共！あの動画や資料はなんだ！」

「お、案外早かったな慧約束守れよ？」

「くっそ！もつと遅く来いよ！また奢んなきやなくなつたらうが！」

「え？なんで急に俺が言われてんの？じゃなくて！お前らあれをどこで手に入れた！」

「なあ顔隠し、あれってなんだ？名称が分からないから分からなくない？」

「あれじゃない？今朝俺がF〇〇でカーマ単発で出したことじゃね？」

「は？お前マジで言ってるの？俺は1〇〇連しても出なかったんですけど？ギルティ」

「運が悪いお前が悪いんです！ざまあねえな！」

「俺を無視すんな！お前らが報道陣に流した俺の情報だよ！どこで手に入れやがった！」

どうすんだよ！これじゃもう俺は終わりだ…」

「知らねえよ自業自得だ、そもそもお前のせいで人生が不幸にまみれた人がいるんだからしやーない諦めな」

「ふざけんなよ！俺がお前たちに何したってんだよ！一体何をしたんだよ！迷惑かけてねえだろ！」

「そりやあ今回何も無かったら気づかなかつたし何かをすることも無かつたな。でも今回気づいちまった気づいたからにはやらなきゃならねえ。俺たちはヒーローでもなんでもない全ての悪事を事前に倒すなんて不可能だ、だからこそせめて自分の周りで起きることは全力で阻止するんだよ。」

「まあ諦めてお縄につきな…最初から外で待機させてたからそろそろ来る頃だろ」

「うわあああああああ！」

「さてこれで終わりだ」

~~~~~その日の夜~~~~~

「あくやつと事情聴取終わった！」

「お疲れ様楽郎君、これで君の無期停学も終わったんだよね？」

「おー今日は色々疲れたよ…」

「そりやあねw大会優勝に事情聴取って凄すぎでしょww」

「ほんとそれな…マジで頑張ったよ…」

「てか学校の校長はどうなったの？」

「ああなんかそれに関してはこのが明るみになる前から辞任してたらしい俺が無期停学食らった2日後くらいにらしい」

「へえなんで？」

「わからん、でもクラスメイトから早く学校来てくれつてめつちや連絡来たわw」

「うーわまじかwてことは明日から学校なのか…頑張れよ学生！君の青春はまだまだこれからだぞー！」

「そうだな、明日からまた日常が始まる…でも俺は最後にしなきゃならない事がある」  
「しなきゃいけないこと？」

そう、俺はやらなきゃいけない事がある。伝えなきゃいけない気持ちがある。日常が始まる前に、この気持ちを伝えるんだ

「永遠、俺は今回の1件でお前が俺にとってどれほど大切な存在か思い知ったんだ。好きだ！付き合ってくれ！」

「ほへえあ？」

うおつすげえマヌケな顔してやがる！

「ぷつ、アハハハハハ！なんちゅー顔してんだよ！あの最強の外道騎士王でも不意打ち

には弱いってか!」

「そそ、そうだよ! 弱いさ! あーもう! なんでもそんなに急に言うかな!」

「嫌だったか?」

「嫌じゃないさ! でも!」

「でも?」

「嬉しいのと恥ずかしいので顔見せるのが恥ずかしいよ: / /」

「: : やっぱ可愛いなこれからもよろしくな大好きだよ永遠」

「ッ! 私も大好きだよ! 楽郎君!」

~~~~~  
シャンフロ内秘匿の花園にて~~~~~

「セツちゃん私にも遂に大好きな人が出来たよ: : 貴女にこれを面と向かって報告できないのは少し口惜しいからここで報告させてもらうよ。その人に最近告白してもらったんだ。凄く嬉しかったんだよその人に私は助けて貰ったりしてさ何も返してあげてないんだ。だからこれから時間をかけてゆっくり返していくつもりなんだ。相手の子が凄くいい子でさ私の彼氏にはもったいないくらいなんだから敵も多くて困っちゃうよwでも手放す気はないんだ。だって大好きなんだからさ。でもやっぱり高校生とモデルだから世間体は悪いけどそれでも付き合いたいって思うくらい好きなんだから

絶対離さないよ」

「さつてと、報告も済んだことだしそろそろ行くよ。またねセツちゃん次は彼氏も連れてくるよ」

『そう、よかつた貴女にも素敵な人がめぐり逢えたよう。辛いことがあつた分存分に幸せになりなさいね…』

？今なにか聞こえたような…まあ気のせいかな、さーて！そろそろサンラク君のところに行きますか！

苦難の雲はとうに過ぎ去り、それを乗り越えた者たちに幸せの陽射しが永遠にさすことになるだろう。

2人が前を向き続ける限り幸せは尽きることが無い

## 見学者と失恋 楽郎×玲

バン！バン！ドゴツ！

なぜ俺はこんな所にいるのだろう…

「あ、楽郎くん今のどうでしたか!？」

「ああ、玲さん凄くカツコよかったよ相手も手も足も出ないくらいにさ」

「ツ！ありがとうございます！それではもう少し行つてきます！」

「頑張つてね」

今俺がいるのは玲さんの親戚の道場、そう竜宮院流の道場に見学に来ているのである。なんでいるのかつて？そんなのこつちが聞きたいわこんちくしよう。うーわ周りからの視線ちよー痛いマジやばい部外者を排斥するかのような視線を感じるう！

なぜこんな所に居るかと言うとかれこれ3日前に遡る…

~~~~通学路にて~~~~

「あーもう！ほんとになんでなんだ!？」

皆様どうもこんにちは。本日はお日柄もよく綺麗な青空が広がっており私の心とは裏腹に清々しい天気となっております。なぜ私の心が荒れているかと申しますと昨日



の幕末での出来事が関わっております

『新イベント！魔刀令実施！？素手限定バトルロイヤル』

が開催決定されたのです。開始は2週間程先なのだがシャンフロのようにスキルのアシストがないのに素手で渡り合うのはキツく今回のランクインは諦めようとしていたのだが今回のランキング報酬の能力が装備中に限り攻撃をすると周囲にノックバツク判定のある衝撃波を放つというものがあって何がなんでも勝たなければいけないのだ

：

「…しかしあのクレイジーランカーたちになんの戦法もなしに戦うのはやはり無理が…誰か武術をやってるものは…」

「あ、あの楽郎くんおはようございませしゅ！」

「ああ…おはよう玲さん…」

「楽郎くん？いつもより元気が無さそうですけど何かあったんですか？」

「ああ、まあ今やってるゲームに急にステゴロでのイベントが始まるみたいだからどうしようかなあつて考えてたんだよね」

「…なら今週末一緒に道場に行きませんか？実は今週末親戚の道場に運動がてら行くんですけど見るだけでもなにか掴めるかとも思っています…」

「え!?!ほんとに!?!やった!?!ありがとう!?!やっぱり玲さんは俺の女神だ!?!」

「くあwせ d r f t g y ふじこーp」

「ありがとう!!後で必要なものとか連絡してね!よっしや今日も張り切っていくぞお  
!」

~~~~~10分後~~~~~

「俺は朝から捕まえられる謂れはないぞ」

「ほう本当にそういうか。被告陽務楽郎、平日の朝から我らがアイドル斎賀さんに対し『女神だ!』等といいナンパし、デートを決めるなどという重罪を起こしている。被告反論を述べよ」

「俺は悪くない!悪いのは全てあの雑じだ!」

「は!?!なんで俺!?!俺なんもしてねえよ!」

「ほう被告続けるといい」

「私は昨日彼のポエムをたまたま見てしまい彼の心を揺るかのような詩に感化されてしまい感極まりあのような言葉を出してしまったのです!」

「ほうならしやうがないなら暁ハート先生の新作を朗読とピアス穴拡張の刑で許してやろう」

「もはや優しさなし!?!俺なんもやってないのに!逃げるんだよオ!スモーキー!!」

『神は言っている、ここでピアス穴を拡張する運命だと』

「おい誰だ！エ○シャダイ風のナレーション入れたヤツふざけんや！ちよまつて嫌だアアア！」

「ふうこれで平和になった！」

~~~~~道場にて~~~~~

あ、完全に俺のせいだったわ☆でもまさか何十人もいる道場とは思わないじゃん！  
ん？なんかボソボソ声が聞こえる？ような：

『ちつ、なんであんな部外者がここにいんだよ』

『まじ鬱陶しい…キモすぎなんだよあいつ』

『なんで玲さんはあんな弱そうな奴に釘付けなんだ！納得いかねえ…目を覚まさせな  
きゃー！』

あー色々聞こえてきたなあ聞こえちゃったなあ何故か周りからの殺意が半端ねえ  
よオ…あ、今の動き凄いなあ今度真似をしてみようかなあ

「ねね玲さん少しいいかな？」

「はい？ どうしたのですか？」

「少し外の空気を吸ってくるね」

「あ、そうなんですか？そしたら私も少ししたら外に行きます」

「うん分かった待ってるよ」

くく外にてくく

「うーむ特に何もして無かったけどなんか妙に疲れたなあ…ずっと落ち着かない感覚だったしなあ…」

バシヤ!

急に滴る水に対して俺は驚くでもパニックになるのでもなく逆に冷静になつて物事を考えていた

(何だこれ水か?雨が降っているわけでもないし嫌がらせだよなあしんどいなあ…)

「お前さあ急に道場に来てなんなの?気持ちわりいな玲さんのストーカーかなんか?わざわざ付いてきちゃつてさあ迷惑なんだよねえ」

「ただの同じ学校の友達だよそつちこそ急に水をかけるとか失礼なんじゃないのか?」

「は?お前のことは興味無いからどうでもいいんだよ。てかさもう二度と玲さんに近づかないでくんない?正直俺狙つてるんだよねえ」

「そんなこと知らねえよ」

「は?お前に拒否権ないからま、そゆことで」

…はあなーんでこの平和な世の中にあんな面倒いのがいるんだろぅねえ…まあ玲さんが来るのがまだまだでよかつた…来てたらガチギレしそうだしなあ

「楽郎くん!?大丈夫ですか!」

「ああ玲さんお疲れ様。俺は大丈夫だよ、心配しないで」

「誰に水をかけられたんですか！さっきのあの人が…」

「まあまあ落ち着いてよ玲さん。嬉しいけど落ち着こう？誰だつて自分たちのコミュニケーションに異物が紛れ込んだりしたら嫌なもんだからしようがないんだよ」

「だからつてこれは…ふう、わかりました。では戻りましょう」

「うん、そうだね」

~~~~道場内にて~~~~

「いやさっきのストーカー君の顔といたらもうwお前らも見にくりや良かったのにさあw」

『なあ気のせいかな知らんが玲さんこっちに來てね？』

「あれ？ホントだ、玲さんどーしたの？急に」

「いえ、ちょうど貴方に話がありました」

「ん？なになに？何かあったの？玲さんのお願いならなんでも聞いちゃうよ！」

「なら1回試合をしていただけませんか？」

「そんぐらいお易い御用よ！やっちまうかい？」

「はいそうしましょう」

~~~~1分後~~~~

「は？」

あゝありのまま起こったことを話すぜ。急に玲さんがさつき水をかけてきたやつに試合を申し込んでいたから止めようとしたら直ぐに始まつちまつたんだ。しようがないからそれを見ることにしたんだが始まつた10秒後には相手はもう既に倒されていったんだ。何を言っているか分からねえだろうが俺も分からねえ：頭がどうにかかなりそうだった、運とか力技とかそんなちやちなもんじゃあ断じてねえ

玲さん強すぎやろ：

「皆さん少し耳を傾けていただけますでしょうか？本日先程私の大切な人に水をかける不届き者がいました。今回がとても優しく心が広い御方だから許して貰えましたがこれが他の客人であつたり私だつたとしたら絶対に許しません。もし今後私の大切な人に出したらこんなものじゃ済ましません覚えておいてください！以上です」

すげえ1部の男性たちが失恋したかのように心折れて真つ白になってやがる：

「あの、楽郎くん、本日は大変申し訳ございませんでした！」

「いやいや、玲さんが謝ることじゃないよ、こちらこそありがとう」

「ツ！いえ、それほども…」

「お礼に玲さん夜ご飯食べに行かない？もちろん俺の奢りでさ」

「い、いえ！奢りだなんて！申し訳ないですよ！」

「いやいや、今日はいいいものを見せて貰えたし、色々嬉しいこと言つて貰えたからさ。受け取つて欲しいな」

「な、なら一緒に行きましょう…」

「よつしや決まりだ！」

『お前らもう付き合つてくれよ！』

「よし皆さん修行再開です！」

『オス！』

## 前途多難な恋心 楽郎×京極

~~~~~シャンフロ内某所にて~~~~~

「ねえサンラク、昨日なんか見かけなかったけど幕末のイベント参加したよね？」

「は？昨日イベントなんてあったのか？」

「あったよ？緊急巨大代官イベントで巨大化したヤツを倒すっていう」

「報酬は？」

「ランキング入りした奴に特殊大太刀だって」

「京ティメット手に入れたのか？」

「まあねえ」

「へえそかそか、ところで今日幕末行かない？」

「ヤダよ！でも欲しいのか？」

「まあなあ、くれるのか？」

「いいよ？僕には使わずらい武器だったしその代わりに条件がある」

「条件？金銭はキツイんだが…」

「そんなんじゃないよ名前を教えて欲しいのさ」



「名前？なんで急に？」

「いや僕だけ知られてるの不公平すぎるからさ」

「まあそんなことでいいなら、俺の名前は陽務楽郎だ」

「おーサンクスなら後で渡すよ」

~~~~~翌日~~~~~

…まさか幕末に緊急イベントなんてもんがあつたとは…運営め侮れん！

しかしまさかあの京ティメットが素直を刀を渡してくるとはなあ…

絶対『やっぱり渡さん！天誅!!』とかしてくると思つたのに意外だ…

「おい陽務朝から元気ねえなどうした？」

「おー暁ハート先生おはよう昨日の新作読んだぜ甘酸っぱい青春のポエムは最高だった

ぞ」

「見るの早くない!?!もしかして昨日の一番最初の感想って…」

「お☆れ☆」

「ちくしょう!つてのはどうでもいいんだよ!どうでも良くはないけど…今日転校生が

来るらしいぞっ」

「転校生?なんで急に」

「なんでも家の都合で京都から引越したとか何とか。剣道がめっぽう強いらしいんだ

ぜ」

「ほへーそうなのか。お前一体どこからその情報仕入れてるんだよ、ちなみに男？女？どっちよ」

「女子らしい」

「お、マジか！そりや楽しみだわなホームルーム前に起こしてくれ」

「了解」

~~~~~30分後~~~~~

「おーいガキ共席に着けホームルームの時間だ〜」

教育委員会に見してやりてえこれが教育者の朝の一言目ですよ奥さん

そーいえば転校生来るんだっけ…いやまて、凄く嫌な予感がする。情報を思い出せキーワードは転校生、京都、剣道、女子…いやまさかそんな訳ないそうだとしてもほかにクラスがあるきつと乱数の女神は俺を見捨てたりはしない！さあ転校生よ名を名乗れ！

「どうも皆さん初めまして、京都から転校してきました龍宮院京極です。よろしくお願います。」

はーいアウト！とりあえず顔を逸らすんだ！まずはそこからだ！

「とりあえずこの時間は質問コーナーだからだくだらない質問したやつがいたら単位没収だか

らな〜」

『剣道部に入りますか?』

『いえ、こつちでは入るつもりはありません』

『知り合いはいますか?』

「知り合いですか? 知り合いというか深く繋がっていて人には上手く伝えられない関係の人がいますね」

!?! やろう! 変なことを口走りやがった! とりあえず今すぐ離脱せねば!

『そいつの名前を教えてください!』

「そうですね…」

コツコツ…:なんか近づいて来ている音が聞こえる…まさか

「やつと会えたね楽郎、君と会うのを凄く楽しみにしてたんだ…」

「おい! 龍宮院誰かと勘違いしてるんじゃないのか?」

「何言ってるのさ面白い冗談を言うんだね楽郎」

うわあ! くつつくなくつつくな! 周りからの視線がア! と、とりあえずコイツを引き剥がして誤解を解かねば!

「ち、違うんだ! コイツとはゲームで知り合っただけで!」

「酷いよ楽郎…:昨日はあんなに激しくしたのに…:私は君の遊びたい時にだけ呼ぶ都合の

いい女なのかい!？」

／＼（〇〇）／オワタ 視線が突き刺してくるう特に女子からの視線が痛い!

「先生!」

「なんだ」

「少しゴミ掃除していいですか?」

「おー激しくすんなよ」

『なあ陽務ちよつと裏で話し合わないか?』

「そうかならとりあえずそのスコップなどの工具類をしまつて人通りの多いところで話し合おう」

『そうかそうか、了承してくれるのか』

なぜ俺のクラスメイトは致命的に人の話を聞かないんだろう…俺が聞かないからか

「先生!あなた教師ですよね!?大切な教え子が集団で暴力を振るわれそうなんだから少しくらい助けようとしてくださいよ!」

「いやあ正直止めんのめんどくさいし陽務1人で騒動が治まるんならそれでいいかなあつて思うんだよね」

「そうですか、なら俺はこれ終わったら教頭先生の所に行つてきます」

「お前達！一人に対して集団で暴力を振るおうとはなんとも情けない！席につけ！ホームルームの続きを行う！」

俺はこれを即落ちニコマの代表例にするべきだと思おうわあ

~~~~放課後~~~~

「おい、龍宮院ちよつと着いて来てくれ」

「ええ、僕はこれからこの学校の窓ガラスの枚数数えるという予定があるんだけどお…」

「バリバリ暇じゃねえか！晩飯奢るから着いて来てくれ…」

「しようがないなああそんなに僕とデートしたいのか…」

「もうやめろよ！周りからの視線が凄いいことになってるんだよ！」

「あははははは！じゃあ行こっか！」

ギョツ

…急に手を握んなよな…

## 心は乙女な外道モデル 楽羽×永遠

「ほらほら！楽羽ちゃんもつとしつかりポーズとつてよ！」

「ちよ、まつてよ！私今までこういうのした事ないからよく分からないだつてば！」

私こと陽務楽羽が人気モデル天音永遠とゲーセンでプリクラを撮っているのかと言う話は昨日の夜まで戻る

くくく外道グループチャットくくく

楽羽：え？何このグループ

永遠：読んで字のごとくですが？

慧：1番わかんないのはなんで僕がここに入れられてんの？

楽羽：永遠：『そりやお前が外道だからだよ』

慧：解せぬ

楽羽：まあ慧のことは置いておくとして

慧：てか僕の時間が遅いだろうから二人で遊んで来たら？とりあえず楽羽ちゃんは後で便秘ね

永遠：2人とも流れる動作で決闘しようとするのはやめようよ……てか1人だけ仲間はずれとか流石にしたくないなあ

楽羽：そうだね、なら午前中は二人で遊んでその後に慧と合流つてのはどうかな？

慧：僕としてはありがたいけどいいの？

永遠：当たり前でしょ？

楽羽：うん！それに私たちには慧がいないとダメなんだよ！

慧：2人とも……

永遠楽羽：『私達にご飯を奢ってくれる人がいなくなる！』

慧：やつばそんなだろうと思つたよ！少し感動した僕の心を返せ！

永遠：まあそういう訳で明日の朝迎えに行くから待つてね

楽羽：了解、何時頃に来るの？

永遠：そうだねえ10時半頃かなあ

楽羽：ならついでにうちの妹に会っていつてくれない？そろそろ会わせろつてうるさくてさ

永遠：いいよ！私も前に電話してから会いたくなつたんだよね

楽羽：じゃそういう訳で

永遠：慧：おー

くく個人チャットくく

永遠：ねえ！私しつかり誘えてたかな!?

慧：誘えてたと思うけど毎回僕をダシにするのやめない？

永遠：緊張するんだからしょうがないでしょ!?

慧：へえあの天下の天音永遠が想い人一人に緊張ね

永遠：うっさい！そんなこといってると電脳大隊にお願いして君の女装写真集出させるよ!?

慧：マジでごめんなさい…まあいいや明日迎えよろしくね

永遠：（今いいって言ってたよね？）よし！分かったよ任せといてね！

慧：嫌な予感があるのは気のせいかな？

永遠：キノセイキノセイ、ところでカツオ君を迎えた後どうするかね

慧：考えてなかったの？

永遠：楽羽ちゃんを誘うことで頭がいっぱいだったんだよ！

慧：乙女か！自分の歳を考えなよ！

永遠：君は言ってはならないことを言ってしまったね…覚悟しておけ

慧：いや、あのちよつと口が滑ったというか間違えたというか…



永遠：ギルティ

慧：具体的にはどんな罰を？

永遠：ふふふふふふふふふふ

慧：明日財布に金がある程度入れとこ…

〳〳〳数時間後〳〳〳

社長：今度君の女装写真集作るつもりだからどういうシチュエーションがいいか考え  
といてね

慧：え？

社長：いやね？とある所からお願いがあつて前々から要望のあつた君の女装写真集を  
出すことに決まつてね

慧：（永遠のやつやりやがった！）逃げられないやつですか？

社長：諦めてくれ

慧：…お願ひがあるのですが僕一人の女装写真集じゃなくてゲスト2人と僕を含めた  
三姉妹の日常つて感じの題名にして貰えます？

社長：そのゲスト2人は？

慧：片方は芸能人、もう片方は一般人ですけど充分可愛いです。

社長：許可する。だけど誘うのは自分でやるようにね

慧：了解しました

## 私の光 楽郎×紗音

「ほらあ楽郎くんこれ美味しいからさあーんしてあげるから口を開きなよオ」

「断る。なんか変なの入れられそうで怖いわ」

「挿れられるのはどっちかというときと楽郎君じゃなくて私n「やつぱり美味そうだから食わせてくれ!出来るだけ早く!」もく正直じゃないんだから」

「どうしてこうなったんだ…」

俺がどうしてデイスロこと彬茅紗音とカフェで仲良く(?)デートしているかと言うと話は1週間前に遡る

~~~~~1週間前新大陸にて~~~~~

「サンラクくん君さあこの前のJGEに行ってたでしょ」

「え!?!」

「なんならスワローズネスト社の新作ゲームで初見ハイスコア叩き出してたでしょ」

「貴様!それをどこで知った!」

「そのセリフをリアルで聞くことになるのは予想外だったなあ」

ありえない!あの場に知り合いは旅狼のメンツしかいなかったはず…それにアイツ

の性格上見つけたら確実に接触してくるはずだ…!

「いやね、見つけたから声掛けに行こうと思っただけだね、お父さんの仕事の手伝いで行けなかったんだよねえ〜」

「そ、そうか…（それぐらいならまだバレても問題はな…）」

「代わりに君のお家を知ることが出来ただけだね♡」

「最悪だ！なんで！どうして？どうやって!?!」

「単純に君のことを尾行した♡」

「こっわ！まじ怖！」

「ふふふふふふなんなら明日会いに行つてあげるよ♡」

「もう疲れたから落ちるわ…」

俺はこの時に気がつくべきだった。こいつに家を知られることのヤバさを、こいつの実行力の凄さを、こいつの不気味な笑みの正体を…

くくく翌朝くくく

「ふわあ…よく寝たな俺、もう11時か久々に長く寝たな」

ガヤガヤ…

家が妙に騒がしい誰か来客が来ているのだろうか？

まあいいかさつさと降りよーつと

「お兄ちゃん起きるのが遅い！」

「んあ？なんかあったのか？」

「お兄ちゃんにお客様だよ！それも超VIPの！」

俺に客？んー思いつかない

「聞き間違いじゃないのか？」

「そんな訳ないでしょ！陽務楽郎君に会いに来ましたって言ってたよ！それに昨日の夜も一緒にいたんだって！」

「は？昨日の夜はシャンフロを…」

『会いに行つてあげるよ♡』

…まさか!!

ドタドタドタドタ!!

「あ、おはよう楽郎君。よく眠れたかな？」

そこには目を疑うほどの絶世の美女がいた。まるで絵画から出てきたかのような美しさだった、星空のようであり滑らかな絹のような髪に全てを飲み込むような黒の瞳、シミ一つない白い肌とても整ったプロポーシオン、まさに完璧な女性と言える…がこの声を俺は知っている、サンラクは知っている

こいつは…ディブスロだ！

「あ、少し2人で楽郎君とお話がしたいのでお部屋に行っても大丈夫ですか？」

「あ、それくらいならもう好きだけどうぞ！後でお茶菓子などをお持ちしますね！」  
「ちよ母さん！俺の意見を「そんなものに興味はない」…」

家族の絆は儚い…

~~~~楽郎ルームにて~~~~

「初めまして楽郎くうん♡」

「これなんて悪夢？」

「とりあえず自己紹介をするね、私の名前は彬茅紗音、紗音ちゃん♡って呼んでね」

「クソ凸野郎って呼ぶわ」

「酷いねえまあ会えて嬉しいよサ・ン・ラ・ク君♡」

「会えて絶望してるよタイプスロ」

「私と会えた感想はどうだアイ」

「最悪」

「即答しましたかあ、でも恥ずかしがらなくてもいいんだよオ私の美貌に見とれてたもんねえ楽郎君♡」

つー…こいついつ気が付きやがったんだ…！

「そりゃああんなに見つめられたらねえ〜」

「人のモノローグを読んでるんじゃないやねえ！」

人の心を読めるとか化物かよ…

「私は君と仲良くしたいだけだよオ」

「信用できないことこの上ないんだよなあ」

「本当だよ、楽郎君。君なら私の口調でわかるでしょ？」

…確かにこの口調はスペクリ時代ディブスロ、ナツツクラッカーが見せた素と同じ  
トーンで口調でおんなじだからなあ…疑うのはなあ

「はあ…信じるよ…」

「やった！ならさ、来週って空いてる？」

「空いてるけどさあ…それがどうしたんだ？」

「デートしようよ、2人でさ」

「は？まじで言ってる？」

「マジのマジだよ、いいカフェ見つけたんだよね」

「はあ…いいけどさあ…」

「ホント！約束破ったら…わかるよね♡」

「ヒエ…」

「そんなに怖がらなくてもいいんだよお…」

「怖がるなっていう方が難しいだろうが…」

「うふふふふふ、それじゃあ私はやること終えたしそろそろ帰るとするかねえ」  
「なら下まで送って行く」

…ガチャー！ドタツ

コイツ聞き耳立てやがったな…

「お前そこで何してんだあ…」

「でもだつてさあ、あの冴えないお兄ちゃんがこんな美人さんと知り合いとかありえないから気になるに決まってるじゃん！」

「だからつてお前…」

「気にしないでいいよ、ね？楽郎君」

「2人で何を話してたんですか!?!」

「おいコラ瑠美！いくらなんでも初対面の人にそんなことを」

「別に大丈夫だよ、楽郎君。さっきの質問だけどデートの約束をしてたんだよ」

「ほんとうですか!?!」

「おい！なんでそれをばらすんだよ！」

「だつてえ、やましいことしてる訳じゃないしいもしかしてえ、私になにかやらしいことでもしようとしたのかなあ!?!大歓迎だよ！」



「だあー！もう、お前は1回黙つてろ！違うんだ瑠美、決してそういうことをする訳ではなく…」

ダッ

ガシッ

「…お兄ちゃん手を離してくれないかな？私には用事があるの」

「内容によつては離してやる」

「…お父さん！お母さん！お兄ちゃんがおとなの階段登つちやつたア！」

「瑠美イ！」

「あはははは！ほんとに楽郎君の家族は面白いねえ！」

「そんなこと言つてる場合じゃねえ！誤解解くのに手伝えやあ！」

くくくその頃齋賀玲はくくく

「…ハッ！ライバルが生まれた予感！」

謎の第六感が働いていたという…

## 伝えられなかった言葉

楽郎×京極

まさかこんなことになるなんて思わなかった…あの人に一番近いのは私だと思っていたから。油断していたといえましょう。このまま行けば自ずと自分が選ばれるのではないかと鷹を括っていたのもあるのかもしれない。もつと、もつとはやく、自分の気持ちを伝えればこんな結末にはならなかったかもしれないのに…

くくく正月、齋賀邸にてくくく

「やおお久しぶりだねく元氣してた？玲さん」

「はい、お久しぶりですね京極ちゃん。珍しく上機嫌ですな？何かあつたんですか？」  
「あつたというかく起きるつて方が正しいんだよねえ」

「起きるつて…何がですか？」

京極ちゃんが凄く悪そうなニヤケ方してる…なんか嫌な予感がするなあ…

「そりやあ…教えてくれるんだろ？サンラクの連絡先とかさよ」

「な、なんでですか!?そ、そもそもなんで教えなきやいけないですか!」

「いいじゃないかく減るもんじやないんだし、そもそも玲とサンラクは付き合つてないんだろ?なら別にいいじゃないか」

「付き…た、確かにそうですけど…」

「なら決まりね！ほら、はやくう！」

「うう…」

楽郎君…ごめんなさい…！

くくくソゲーマー side くくく

やっぱりこの時期の外はやっぱり寒いな…そろそろライオットブラッドをネット通販で頼むのも考えるべきなのかもしれないなあ……ん？メールか？また鰹辺りから変な誘いか？全力で断るしかあるまい！

『やつほーサンラク！一応初めましてかな？当然誰だかわかってるよね？』

『???イタズラメールにしてはおかしいよなあ…俺のネーム知ってるし…誰だ？とりあえず返信してみるか』

『すまない君が誰だか分からない、ところでその名前とこのアドレス誰から聞いた？』

『分からないなんて悲しいなあ…私達は結構良く仲良くしてるはずなのになあで…もしかしてそう思ってたのは私だけなの？』

こいつは俺の事を知っているのか？

『もしかして俺を知ってるのか？誰なんだ？』

『誰って失礼だなあ』

「私達はよく斬りあつてるのにさ〜」

ツッ!この声はツ!…俺は気がつくのが遅すぎたんだ…俺のプレイヤーネームを知っていてメアドを持っている女性は2人、片方は外道だから無いとしてもう片方には流派のことで色々ある、外道ではない方の女性と知り合い、尚且つメアドを簡単に貰えて一人称が私、その上斬りあつているといえばただ一人しかいない!

「天誅ツ!反応が遅いねえ…いつもの反応速度はどうしたんだいサ・ン・ラ・ク♡」

「あれはゲーム内だからこそ出来る速度であつてお前みたいに剣道してる訳じゃないんだよ京極<sup>京タイムツ</sup>」

「そんな道端で殺人鬼に出くわした時みたいに体を強ばらせないでよオ」

「いやいきなり怪文書送られてきてその上天誅されかけたんじゃ警戒するの当たり前じゃないですかねえ!」

「そんな寂しいこと言うなよwところでコンビニの帰り?」

「ん?ああ、ライオットブラッドが切れたんでな買い出しにでもと」

「ライオットブラッドかあ飲んだことないなあ…1本ちようだいよ」

「1本くらい構わないが…とところでお前は何しに来たんだ?」

「私は親戚の集まりで来てただんだけど君と玲が知り合いだということを思い出してさ〜平和的に君のメアドとか聞いたのさ〜」

あれ？俺のプライベートは何処え？

「そんな物存在してるわけないじゃん」

「ナチュラルに人の思考読むの辞めない？てかなんで俺の居場所が分かったんだ？」

「完全に偶然だよ、親族の集まりが予想の5倍はつまなくて面倒な事は玲ちゃんに押し付けて逃げてつつメールしてたらまたまた見つけたから嫌がらせしに来ただけだよ」

「俺の周りのヤツらは人に嫌がらせしないと死ぬ病気にでもなっているのか？」

「それ君も言えたこと？」

「しーらね、でお前このあとどうすんだ？」

「特に考えてなかったからこのままサンラクについてってデートかなあ」

「サンラクって呼ぶな、デートって言うな！この光景を万が一クラスメイト達に見られたら異端審問会が開かれちゃう…」

「君のクラスメイト怖すぎないかな!?」

「まあ着いてくるには構わんが…寒いからうちでいい？」

「いいけど私としては男の人の家に上がるのは少々身の危険を感じてしまうなあ」

「そんなニヤニヤした面で良く言えんなお前の方が単純に強いだろ」

STRの差がとても凄いですよね

「てか私サンラクのことなんて呼べばいいの？」

「んー、楽郎でいいよ」

「じゃあダーリン♡」

「はい、お前後で幕末な」

「今ここで決着付けてもいいんだけど？」

「マジでごめんなさい」

全力で土下座しようとして止められました

~~~~~楽郎家にて~~~~~

「あれ？ダーリンの家族は？」

「だからダーリン言うなやめろ、母さんは知り合いの昆虫採集家のところに、父さんはカジキがどうたら言って知り合いと海に行った、妹は読モの撮影でいなくなった」

「まって？確か玲さんのおじいさんも確か今日釣りに行くなって言っていなかった気が

S

「待て京極それ以上は言うんじゃあない」

「アツハイ」

「まあとりあえずやることも無いから正月特番でも見ながらゆつくりしようぜ」

「そうだね、でもーっお願いしてもいいかな？」

「お年玉ならやれないぞ」

「別にそれが欲しいわけじゃないよ、ただ一緒に写真撮って欲しくてさ」  
「別にそれならいいが…」

(なんかこいつ無駄に距離が近い気がするなあ…)

~~~~~3時間後~~~~~

「そろそろ玲さんに怒られるから帰るね〜」

「おー次はいつ来るんだ？」

「それはお楽しみつてやつさ楽しみにしててよ」

「怖すぎるなあ…まあそうしとくよ」

「それじゃ、今年もよろしくね〜」

~~~~~旅狼チャットルーム~~~~~

京極：今日サンラクとお家デートしたよ☆

サンラク：おいてめえ！

ペンシルゴン：え？

オйкаッツオ：マジすかw

サンラク：オйкаッツオ君5スレ目に言ったそうですね

オйкаッツオ：今その話は関係ないだろお!?

サイガ―0：どういうことですか

京極：それじゃまた後でねえ

サンラク：待てゴラア！

その日の旅狼はとても賑わったそうです

~~~~~新学期~~~~~

「それでは陽務楽郎の新年最初の異端審問会を始めます」

「待て、待ってくれ俺が何したって言うんだ！」

「貴様は元旦から美少女と出歩きイチャイチャしていた疑惑がある！よって処刑を執行するー！」

「審問会開始してから処刑まで早すぎませんか!？」

「雑ピ裁判長どうしますか？」

「処刑執行」

「暁ハート先生新春ポエムとても感動しました宣伝しておきますね」

「おいなんでそれ知ってんだよ！」

「者共奴を抑えろピアス穴拡張の刑を執行せよ」

『ハッ！了解です閣下!!』



「おい待ておかしいだろ！スケープゴート早すぎません!?てかお前ら手のひら返しすぎだろ！」

ふう逃げ切ったぜ…

「おーいお前ら席に付け！今日は京都からの転校生紹介するから大人しくしろ〜」

「せんせーいくらなんでもこの時期は急過ぎませんか〜」

「ご都合主義というやつだ気にするなく、転校生入ってこーい」

『メタ過ぎないかこの教師!?!』

「京都から転校生してきました龍宮院京極といます、この学校に従姉妹と親友がいますので結構リラックスしています、どうぞよろしくお願いします」

「(\*。◇。)」

「陽務?陽務!?!先生陽務の表情がおかしくなってます!」

「☒・?☒☒・☒\*?☒☒☒・?☒☒|?☒☒☒・?☒☒\*?☒\*☒☒|?☒☒|☒」

「もはやどうい感情!?!メディック!メディイイイック!」

「最高の学園生活が始まりそうだなあ」

## 感謝の気持ちを込めて 楽郎×エムル(?)

~~~~楽郎side~~~~

「ねえお兄ちゃん、ペット飼ってみたいんだけどどうかな?」

妹の瑠美が陽務家特有ルールである日曜日の朝食を食べている時に不意に言い始めた

「俺は良いと思うが俺かお前のどちらかが完全に世話をすることになるぞ?」

「え? いざとなればお母さんとお父さんにも手伝ってもらえば?」

「考えてみる父さんは仕事だし母さんは?」

「あつ:確かに:それにせつかく買った洋服が毛だらけになるから無理かあ:」

「急に何があつた?」

「いやクラスの友達と兎が可愛いという話をココ最近してて飼いたいなあと試しに相談したらワンちゃんあるかなあと思つてさ」

「兎かあ:」

そういえばシャンフロを初めてから一番長く接してきて長く冒険してきたのはエム

ルだよなあ…そろそろなんかプレゼントでも贈ってみるか…

「ご馳走様。美味しかったよでもそろそろ肉が食いたいかな」

「諦めなさい。お父さんが鮪を釣ったお陰で当分は鮪のステーキや唐揚げとかになるわ」

「りよーかい」

さてシャンフロにログインして適当な人物に当たってみるかな

~~~~ペンシルゴンの場合~~~~

「私だったら5億マーニかなあ…」

「それはお前の罰金金額じゃねえか。てか払い終わったんじゃねえのかよ」

「もちろん払い終わったよ？でも払いきったせいで残金が心許なくてさあくそういえば黒狼との戦いの時サンラクたしか結構…」

「用事思い出したからまたな」

こいつに渡すくらいならこの世界でう〇い棒を作る為の費用に当てた方がまだマシだな

~~~~オイカツツオの場合~~~~

「やつぱりユニークシナリオかな」

「それ貰えるもんじゃなくね？貰えたとしてもそれタダの便乗じゃね？」

「うるせえ!?俺はサンラクみたいな全自動ユニーク探索機とは違うんだよ!一周回って今は色んなジョブを試してるつつうの!」

「まさに職業体験ってかw」

「よし今から便秘いくぞ、もちろんバグトワードな」

「そういえば女装企画が進んでるらしいけどどんな感じ?」

スンとカツツオの目から光が消えた所で退散。触らぬ神に祟りなしってよく言うよね。あいつの場合触らぬ両性類に祟りなしだけだな

~~~~ルスト&モルドの場合~~~~

「ロボ」

「実用性のあるものですかね」

「モルドはまだ参考になるがロボって…」

「ところでサンラクいつになったら他の規格外戦術機乗せてくれるの?」

「いや、それは…その…」

「ところで他のところで戦術機って作れないのかな?サンラクはどう思モガモガ…」

「今のうちに早く逃げて!多分これ3時間コースですから!」

「おっしやありがとう!!」

聞く相手が間違ってたなこれは。うん、



てくれたけど実用性があつて気持ちか…どうするか

「鳥の人悩みを抱えていそうな顔をしてどうかしたのですか？」

「ん？ダルニヤータか、ちようど今エムルになんかプレゼントでも贈ろうかと思つたんだがいいのが思いつかなくてな。そういうダルニヤータはどうしてラビッツに」

「ヴァイシユアツシユ殿への装飾品を届けに参つた次第で」

そういうえばダルニヤータは宝石匠、前に作つてもらつた瑠璃天の星外套には魔法をセツトする能力があつた。もしやある程度狙つた能力を付けれるのではないか？

「なあダルニヤータ君よすこーしお話があるんだけどさあ^^\*」

「な、なんだその不気味な笑顔は…あの、その、ジリジリ近づくの辞めてもらえ…」

ギニヤアアア

兎の国ラビッツではこの日、にこやか(?)な鳥人間と妖精猫の話し合い(?)が行われ妖精猫は嬉しさのあまり悲鳴をあげたという。

~~~~~エムルside~~~~~

ココ最近のサンラクサン妙にソワソワしてる感じがあるですわ？

今日だつて突然ラビッツにいきたいって呼び出したと思つたら急に1人行動を始めるし最近ただの移動用兎と思つてるかもしれないですわ？前までは一緒に冒険に連れて行つてくれたのに連れて行つてくれないし…

「おーい!! エームルー」

噂をしたらまさかの御本人登場ですわ!?

「どうしたんだよエムルそんな不貞腐れたような面して?」

「それは自分の胸に聞いてみるといいですわ!」

「思い当たる節が無いなあ〜」

「なぜですわー! そろそろあたしも冒険に連れて行って欲しいのですわ! なのに最近一切連れて行つてくれないし! そろそろ寂しいですわ!!」

あたしの心の中を出すとサンラクさんは心底驚いた! をしはじめ、

「確かに最近あんまり2人で冒険に行くことも無かったな…行くか?」

「もちろんですわ!! ああとこゝろでなんでサンラクサンは私の名前を読んでたんですわ?」

「ああそれはこれを渡したくてな」

『極夜のミサンガ』

極夜の星空のような輝きを放つミサンガ2つで1つの組み合わせであり同じアイテムを装備した者がパーティーに居る際全ステータス10%up

「こゝ、こないいいアイテムをくれるですわ!」

「当たり前だろ? その為にダルニャータに手伝ってもらったんだからな」

ダルニヤータさん多分今頃倒れてる気がするですわ…

「ありがとうですわ！これでサンラクさんのお役に一層立てるですわ!!!」

「そう言ってくれて俺も嬉しいよ。なんならこのままどっかにアイテム取りに行こうぜ  
！」

「もちろんですわ！サンラクサン大好きですわ！」

サンラクサンは私のことをしっかりと思ってくれてたですわ。それだけで私は力が漲る。足を引っ張らないように全力で手助けをしていくですわ！



Qこれは修羅場ですか？Aはい、これは修羅場です！

楽郎×紗音×玲

これはある澄み渡る様な美しい青空の下本来青春真っ只中の俺の身に起きたちよつとしと「おいコラ陽務ゴラア！」

「人のモノローグ邪魔すんなよ」

「早く白状すりゃあ背骨だけで済むぞ？」

何を？しかも白状したとしても日常生活に異常をきたす事が確定来てるんだが？

「まあまてお前ら、朝っぱらからなんなんだよ」

「しらばつくれるたアふてえ野郎だぜ」

「だから何をだよ」

「昨日！カフェ！この2つだけで意味は分かるな？」

どうやら俺には逃げ道など無かったようだきつとあの時の俺にも予測は不可能だっただろう。事の発端は先々週の日曜日紗音との約束から始まる

~~~~陽務家~~~~

「んじや瑠美ちゃんのお誤解を解いたところでデートについて決めていこうか」

「誤解を解いたのは俺だしなんならお前さつきまで笑い転げてたろうが…ッ!」

「まあまあ細かいことは気にしないの。とりあえず私としては一緒にオススメのカフェに行きたいんだよねえ」

「まあカフェぐらいなら別に構わないが」

「本音としてはカフェよりホテル!よし!何時頃に行くか!」もおせっかちなんだからア  
♪

「こいつと話しているとMP（メンタルポイント）がゴリゴリ削れていくなあ…」

「まあとりあえず扉に耳をつけ話を盗み聞きしている愚妹よ出てこい」

シーン

「…折角天音永遠と合わせてやろうと思ったのになあ」

「すいませんでしたお兄様!今すぐ出ていきます!!」

「やっぱり楽郎君の家族って仲がいいねえまあとりあえず来週の日曜日お昼に迎えに行くから待っててねえ♡」

「せめて普通に来いよ?」

「もつちろんさあ♪それじゃあまた来るね」

…騒がしい奴がやつと帰ったか…きてメールをしておくかなあ

「瑠美しい！着てく服どれにすりやいいかわかんないから手伝ってくれー」

~~~~~当口~~~~~

「もうー時だけど結局何時に来るか聞くの忘れてて」  
「ピンポーン」あいつ狙ってんのか  
？」

「やあ楽郎く〜ん待たせちやつたみたいだねえ」

「なあまさかとは思うが紗音お前変なもの仕掛けてないよな？盗聴器とか」

「…ところでさ見てよ私の愛車レクサスのフルカスタムだよー！」

「その話の逸らし方流石に無理があると思わないか？なあ」

「というか、私の今日の勝負服について言うことはないかなあ？」

ふと言われて今日の紗音の全体像を見た。無地の長袖、フードの付いたスピーカースリーブ。同じく無地で長すぎ短すぎないプリーツスカートはワンポイントの刺繍が程よい愛らしさを出している。そして紗音自身が絶世の美女というのは言うまでもない。だが来ている服装により可愛らしさが出ており、出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいる息を飲むような完成されたスタイルがより引き立てられていた

「ほらほらあ褒めちぎってくれてもいいんだぜえ？」

「…はあ、おら後ろ向け後ろ」

「ええ御家族がいるのにい？やつぱり旺盛なんだねえ」

ニマニマしながら体を少し前屈みに折り曲げながら後ろを向いた紗音に（こいつ学ばねえのか?）と思っただが好都合、音を消し後ろへ近づき腕を回しバックハグの様な形をした状態で紗音の上半身を引き寄せ耳に近づけ、

「俺の為のお洒落をありがとう。形容するべき言葉が見つからないほど綺麗だよ子猫ちゃん」

「ほみよ」

紗音の体がビクンと跳ねたと思っただらそのままぐったりと体を預けてきた…またもや俺の勝ち

「…ω・・（じー）」

「ハッ! まで! 待ってくれ瑠美!」

「おかあさーん! お兄ちゃんが紗音さんにやらしいことしてたー!!」

「落ち着けえ!」

「ここが家なの完全に忘れてた

~~~~~閑話休題~~~~~

「…ん?ここは…」

「やつと起きたか、起きたのならそろそろ動いてくれ膝枕を続けるのも疲れるからな」

「え!? な、なんで膝枕されてるの!? も、もしかして事後?」

「な訳あるかい！お前が倒れたから介抱してたんだよ！ほら、そろそろ行くぞ？家族からの視線が痛いんだよ」

「ん、それは申し訳ないことしちやつたねえこの後ズツポシする？」

「しねえよやめろ家族からの誤解が加速すんだろ！早く行くぞ！」

「はいはいあんまり遠くないから安心してね」

~~~~~数分後~~~~~

「紗音は案外運転上手いんだな」

「案外って酷くなあいい？それでもゴールドなんですけど」

「ワイスピしてくるかと思った」

「流石に無理かな!?まあほら着いたから行こうよ私お腹すいちやつたしね」

「そうするか…」

~~~~~side~~~~~  
?????

「あ、あれは楽郎くん？私服もカッコイイ…で、でも隣の美人の人は一体…見覚えがあるんだけど思い出せない…追いかけなきゃ！」

「あの一？今日私の買い物付き合ってくれるんじゃないかな？」

「早く行きますよ！」

「無視っすかはい」

~~~~~楽郎side~~~~~

「何頼めばいいんだこれ?」

「この店定期的に色んなメニユーが増えるからチャレンジしてみるのも楽しいんだよね」

「もちろん減ることもあるんだよね?」

「減らないよお?無限に増えるに決まってるじゃあん」

「そのうちメニユー表がそこら辺の文庫本より分厚くなりそう」

「結局なににする?」

「美味そうなのが多くて困るわあ」

「オススメとしたらこのオムライスとパフェなんだよね」

「マジで迷う…」

「1番のオススメはやっぱ私のからだ」注文お願いしマース!」もう♡いけずなんだからあ♪」

メンタルがゴリツゴリに削れてく…泣きそう

「ねえ楽郎君気づいてる?」

「ああ〜もし俺とお前の考えてることが一緒なら」

せーの

「明らかに誰かから監視をされている」

「だよねえ」

「まあいいや頼んだの来たし食おうぞ…まつて？もう来たの？早くね？」

「この店注文してから来るまでが異常に早いんだよね、それも冷凍じゃなくて明らかにその場で作られてるんだよね」

「この店が素敵だと思うがその分恐怖が増え始める…」

「あ、このカルボナーラ当たりだ、オムライスどう？」

「感動で打ち震えてる」

「そんなにいい？こつちも一口あげるから楽郎君も一口ちよーだい？」

「構わないが…ほれ口開けろ」

「?!?!」

「何なんかどつかから変な声が聞こえた気がするけど…まあいいや、初手からあんなに流石楽郎くんレベルが高いね！」

「うるさいさいはよくえ」

「ん、やっぱり美味しいねえ、ほら、お返しだよ？ほらあーん」

「んぐつ、あ、ほんとに美味しいマジでこの店当たりだな！リピーターになりそう」

「いいね、また来ようよ、ここ季節のスムージーも美味しいんだよねえ」

「ら、楽郎くん!」

「ん?あれ?玲さん…と?どなたです?」

「あく玲の友達の得間頼花でーす…こんな出会いは流石に予想外だったけどよろしくネ?」

「あーまあ初対面だろうから紹介しとくけどこいつは「彬茅紗音っていいマースその玲ちゃんとはお久しぶりかな?」え?知り合いなん?」

「まあねえお父様の手伝いで何度か目にしたことあるからねえ」

「ああ貴女がああ彬茅コーポレーションの…お久しぶりです。お2人はどのようなご関係で?」

「ネットの知りあ「家族公認のそういう仲でーす♡」おいこらー!」

「んぎゅ!?そ、そうですか…ワタ、私用事思い出したので先に帰りますね?失礼します…」

「え?玲?れーい待ってー?あ、失礼します」

「…おいお前どうしてくれるんだ?これ確実に誤解されたぞ?」

「でも嘘は言っていないじゃん?」

「だとしても重罪だぞ?…はあまあいいやさっさと食うぞ」

「あ、この後買いい物に付き合ってね♡」



「は!？」

この後買い物に5時間付き合わされました：  
以上冒頭に戻る。今すぐ入れる保険ありますか？

## 現実ノンストップギャルゲー 鯉×芋

~~~~魚臣慧side~~~~

どうしてこうなったんだろう…雑誌のインタビュが珍しく午前中で終わったからゆっくり映画でも見ようかと思っただのに…

「ケイ！なんでシルヴィア・ゴールドバーグがゆっくりお風呂に入ってるのよ！」

うん、ほんとになんで俺の家の風呂に入ってるんだらうね

「Hey、ナツメグクールダウンクールダウン」

「ツ！誰のせいでヒートアップしてると思っただけ…というかその前になんでシルヴィアがお風呂に入ってるのよ！」

「それは鍵開けて入ったらケイ居ないからお風呂に入っておこうかと思っただけさー」

「なんでシルヴィアが合鍵持ってるのよ！」

「真夜中にインターホン鳴らされるよりマシだったからさ…」

「ず、ズルい！私にもちようだい！はやく！」

「ええまあいいけどさ…はい、どうぞ。せめて来る時は連絡はしてね？」

合鍵が完全に無くなったなあ…まあいいか

「分かつてるわよ…あ、そうだ。ケイはもうお昼食べた？まだなら一緒に食べに行かない？…おすすめの所があるんだけど」

「？まだ食べてないからいいけど何で行く？」

「あんまり遠くないから徒歩で行かない？」

「Heyケイ&ナツメグ、私の事忘れてなあい？私も行くわ！」

「まあいいんじゃない？行くならはやくいこ？お腹すいたし」

「折角二人で行くチャンスだったのに（ボソツ）」

ん？今メグなんか言ったかな…？まあいいか

くくく食後くくく

「メグ！めつつつつちや美味かった!!」

「そう？それは良かったわ♪」

「MeG v e r y n i c e ! とて美味しかったわ！」

本当に美味しかった…まさかポテトにあそこまでの深さがあるとは…

「ところで少し寄り道していかない？私少し食べ過ぎちゃって」

「メグ、明らかにあのポテトの量は食べ過ぎというか多すぎない？」

「そうだよメグ。流石に心配だよ…」

「い、いいのよ別に！それにあそこの油コレステロール0のやつだし！」

「そういう問題じゃないんだけど…」

「ほ、ほら行くわよ！」

~~~~~数分後~~~~~

俺の家の近くにこんな公園があつたんだ…気が付かなかつたな…

「メグよくこんな公園知つてたね？俺数年ここに住んでるけど知らなかつたよ」

「ここ結構風が通るし気持ちがいいんだよねたまーにご飯買つてここで食べたりしてるんだよね」

「Heyメグ、もしかして一人でご飯を…？」

「そ、そんな訳ないじゃない！いくら私だつてそんなこと「あら〜メグちゃんじゃな〜い」あ、山里のおばあちゃんこんんにちは〜」

「今日は珍しくお友達といるのね〜いいことだわ〜」

「え、いや、あの、今それは…」

メグ…そんな悲しいことを…

「メグ、今度一緒に美味しいご飯食べに行こうな…」

「え！そ、それつてデートのお誘いってこと!?!いつ!?!いつ行く!?!」

「メグつてほんとケイのことスキね〜」

「そ、そんなんじゃないし！なんとも思っていないし！ただの、そう！ただの人ぐらい！」

「oh…… それぐらいにしてあげてケイが予想外のダメージを受けてるから……」

「メグ…… せめて友達位には思っておいて貰えると凄く嬉しいなあ」

「ケイはいいの!?!友達だけで!?!」

「もうメグの思考が読めない！」

「これどう返事するのが正解なんだ？」

「……はあちよつとコンビニまで飲み物買ってくる。2人は何かいる？」

「私はお茶かなあ」

「ケイ！ワタシはコーラ！」

「はいはい分かりましたよーっと」

結構近いから走れば五分くらいで行けるかな？

~~~~~夏目恵~~~~~

「シルヴィア、貴女何がしたいの？」

「？私？ただケイと一緒にいたいだけよ」

「それは好きってことなの？」

「ん…… そうだと言ったら？」

「…… あんまりいい気分じゃないわね」

「でもワタシは貴女よりもケイに近い所にいるわよ？」

確かに。悔しいけどシルヴィアは私より確実にケイに近い所にいる…でも…それでも…ッ！

「ケイは絶対に渡さない！だって私はケイが…ケイが大好きなんだから!!」

「…Heyナツメグ」

「なによ」

「うしろ見てみるのを勧めるわ」

「後ろつてなに…が…」

「あーつとご、ごめん？」

「ツツツツ！ご、ごめんなさいケイ！少し用事思い出したから今日は帰るわ！また今度!!」

「え、あ、うん。わかったよ」

「これから楽しくなりそうネ」

やっちゃった！やっちゃった!!今の絶対聞かれてた！次からどんな顔して会えばいいの!?!どうしよどうしよどうしよどうしよ…!!

~~~~~外道チャットルーム~~~~~

カツツオ：お前らに相談したいことがある

サンラク：なんだ？女装写真集の日程が決まったか？

鉛筆：え？なんでサンラク君まだ社長と私から知らないはずの予定知ってんの？

カツツオ：え？まって？俺の知らないところでそんな話が進んでたの？初耳なんだけど：じゃなくて！相談があるの！

サンラク：なんだよまたなんかに出ろって言うのか？

鉛筆：別にいいけど地上波で流せるの？

カツツオ：それは無理。じゃなくて、多分告白？つぼいのをされたというか聞いてしまつというかそんな感じでした

サンラク：あー大体見当はついた

鉛筆：それってもしかしなくてもナツメグちゃんでしょ？

カツツオ：は！？お前ら知ってたのか！？

サンラク：多分気がついてなかったのお前ぐらいだぞ？

鉛筆：だろうねくでカツツオ君はどう思ったの？

カツツオ：どうって：嫌ではなかったけど：

鉛筆：ならその気持ちをしつかりと伝えてあげな。きつと今頃羞恥心とかその他諸々で悶えてるだろうから

サンラク：とりあえずペンシルゴン、写真集について詳しく決まったら教えてくれ  
鉛筆：まかせて

カツツオ：コイツら：

くくくくくくくくくく

件名：話したいことがある

差出人：魚臣慧

宛先：夏目恵

本文：明日の夜会えないかな？話したいことがあるんだ



## ありえたかもしれないハーレム

~~~~楽郎side~~~~

いつの間にこうなつたんだらう。今日はただのオフ会だったはずなのに……てか何時から詰んでたんだ？

この包囲網逃げ切るってほぼほぼ無理なんじゃないか？ いや！ 諦めなければどこかに手があるはずっ！

ポンッ

「急になんだよ慧、肩に手を置いて……ハツま、まさか貴様もあのグループに!? クソっ！ 遂に魔境に染まつたか貴様！」

「おい待てその想像をやめろ。染まつてないし。まあ多分どうすれば逃げ切れるか考えてそうだから優しいアドバイスな」

「まじで!? 早く教えろ！ 今度発売する女装写真集クラスメイトにステマしておくから！」

「やっぱり話すのやめようかなあ」

「心の底からごめんなさい」

「まあいいだろう。とりあえずアドバイスするのは逃げ切るなんて諦めた方がいいぞ」  
「なんでだよ！なんで諦めるんだよ！」

「まあ現実的な問題で相手側にあの斎賀家と竜宮院家がいる」

「……いや！それぐらいならまだどうか！」

「それに追加で恋する乙女モードになったアイツらがお前が逃げるって言うのを認める  
と思うか？」

「……………」

「諦めた方が楽になるぞ」

後に知ったのだがこの混沌が生まれたのはこの日よりつい数日前だったという……

くくく数日前くくく

【陽務楽郎ハーレムの会！】

京極：え？なにこのグループ……

玲：このグループ名はなんですか

京極：楽郎の？

紅音：はーれむ？とはなんの事ですか？

慧：ちよつと待って？

永遠：集まったね！花の乙女たちよ！皆に提案があるからこのグループチャットを作ったのだ！

慧：ちよつと待つて？

永遠：話を遮るなんて珍しいねどうしたの？

慧：まずグループ名と僕がここに入れられてる理由教えてくれない？

永遠：そりゃあここにいるメンバーは全員少なからずサンラク君に好意を抱いているということ。カツツオ君は：受けだから？

慧：理由になつてないよね？てか僕は普通に女の子が好きなんだけど？というか何故わざわざグループを作った？

永遠：いやね？最初は作る予定もなかったんだけどさ、躊躇いなく告白した人がいてねえ

紅音：それ多分私ですね！瑠美ちゃんの目の前で告白しました！

玲：それどういふことですか

京極：まつて玲から殺気放たれてない？大丈夫？

慧：さすが光属性

永遠：このままで紅音ちゃんに楽郎君墮とされそうだし、それはそれで悔しいし克蘭が気まづくなるからならハーレム作つてみんなで幸せになった方がいいのか

なあって

紅音：私はいと思います！みんなで仲良く好きな人とられるのはとてもいい事だ  
と思います！

京極：僕もいいと思うよ。僕も楽郎は結構好きだからね

玲：た、確かに誰かに抜け駆けされて失恋するよりはみんなで囲んで逃げられないよう  
にした方が確実ですしね：

慧：あれ？結局僕の意見ガン無視？嘘でしょ？

永遠：別に参加しなくてもいいけど手伝いくらいはしてもらおうよ？断つてもいいし別  
に楽郎君本人にこの話してもいいけど…：女装写真集の話進めるしここのメンツを見直  
した上で発言してね？

慧：全力でお手伝いさせていただきます！ですから何卒！何卒ご勘弁を！

永遠：そんなに手伝いたいならしようがないなあ

京極：鬼かな…？

玲：とりあえずどうやって楽郎くんに意識して貰えるようにしますか？

紅音：私は告白してるので多分もう意識されますから…：いつそ素直に楽郎君のハー  
レムを作りたいです！というのはどうでしょう？

永遠：それは結構難易度高くない？

京極：いや、でも僕は結構いい案だと思うよ？玲を見てもらえばわかるけど消極的つてのもあるけど中学時代から好きで最近に至つては一緒に登校とかGH—Cとかにも一緒に行つてゐるのにはぼ気がついて貰えないんだよ？

玲：。。。——（——）バタツ

慧：京極ちゃんステイ玲さん瀕死だから

永遠：とりあえずカツツオ君は楽郎君をオフ会に誘つといてくれる？

慧：了解

~~~~~

件名：オフ会開催

差出人：魚臣慧

宛先：陽務楽郎

本文：永遠がオフ会開くつてよく他にも何人か呼ぶみたい。ちなみに来ないと…察した方がいい。場所はお前ん家だつてよ

~~~~~

~~~~~ 楽郎 side ~~~~

「え？俺に拒否権無いの？なあ瑠美お前最近天音永遠から連絡来たりした？」

「うん来たよー。なんかお兄ちゃんの部屋をオフ会で使いたいんだけど大丈夫かな？」

てもちろんOKしといたよ☆」

コイツ永遠と連絡先交換してからどんどん邪教徒として染まってきてるな…まあ諦めるか

「決まっちゃまったもんはしょうがない。とりあえず玲さんが待つてるみたいだから行つてくるわ」

「行つてらつしやいお兄ちゃん」

~~~~~数分後~~~~~

「なあおいクラスメイト諸君よ、朝一で何もしてない少年を捕まえるのは些かどうかと思うぞ?」

「うるさいぞ陽務二等兵。貴様に発言権は与えられていない!では雑ピ曹長、陽務二等兵の罪状を読み上げるのだ」

「おいなんで俺が雑ピより階級が下なんだよふざけんな」

「それは別にいいだろお!?えーゴホン陽務二等兵、貴様は読モをやっている妹がいるな?」

「毎度言うがお前らごときがうちの妹に釣り合うと思うな。人生リセマラして出直してんか」

「そこまで言わなくてもいいだろお!?ま、まあいい、その読モの妹にとっても可愛らしい友

達がいると聞いた！その子を紹介すれば許してやろう」

「そうかそうか、皆の者！奴を捕まえるのだ!!」

「おい待て！またこの展開か!?!ふざけんな!!」

「そういえばお前たまに授業中に変なメモ帳になんか書いてるよな？読ませていただきます☆」

「おい！まで！話し合おう！話せばわかる！」

「問答無用！」

その日一人の青年の心がまたもや折れたという…

~~~~~放課後~~~~~

「ねえ玲さんちよつといい？」

「あ、楽郎君。お疲れ様です。今日はお世話になります」

「あ、玲さんも来るの？良かったあ知り合いが一人でも多ければありがたいからね。このまま俺の家に行こうよ」

「あ、はい！そうしましょう！」

「ところで玲さんは他に誰が来るか聞いている？」

「オйкаツツオさん、アーサーペンシルゴンさん、秋津茜さん、京極ちゃんだったと思います。」

「京極以外は顔見知りかあ安心」

「?秋津茜さんとはどのように?」

「ああ、知らないか。うちの妹、陽務瑠美って言うんだけど秋津茜と友達なんだよねそれ經由でさ…つともう着いたよほら上がっちゃおう」

「は、はい邪魔します…」

「あ、おかえりお兄ちゃん!もう他の人は揃ってるよ?早く行ってね?」

「んじや行こうか」

「…はい」

「「「いらつしやい!!!」」」

「いや俺の部屋なんだが?」

「まあまあそう言わず座りなよ」

「お、おう」

そりや座るけど何故そこまでコイツら警戒してるんだ?

…ガチャ

「おい待て」

「な、何?」

「なんでその推定京極は鍵を閉めた?」



「あ、初めまして楽郎。京アルティメットこと龍宮院京極だよ。よろしくネ」  
「あ、うん。よろしくじゃなくてね？」

「は？なに？僕とよろしくしたくないってこと？天誅するよ？」

「わあほんとに本人だアじゃなくて！なんで鍵を閉めた!?!そしてなんで紅音は躊躇いなく俺の手を縄で縛ってるんだ!?!おい！」

「いやあ逃げられると困りますからね（・・▽・）ゞ」

「あ、ちなみに私の入れ知恵ではないよ？紅音ちゃんが率先してやってる」

「お前さすがに光属性を濁らせるのはやめろ？」

「一番の危険人物がほざきよる」

「で、俺の部屋の鍵を閉め俺の手を縛った理由について聞こうじゃないか」

「えーそんなに気になるのお？」

「あ、結構です」

「聞かせてあげよう！」

ただの強制イベントだこれ

「実は私たち全員君、陽務楽郎君の事が好きです！」

.....はっ

「あ、ヤバい意識が宇宙に飛んでる」

「…はっ！いや待て！紅音なら分かる！この間告白されたからな。でもえ？いや、んー？まじっ！」

「マジのマジだよ楽郎。僕達は君が好きなんだ」

「え、でもそれって…克蘭が潰れるよね？」

「まあまあ落ち着きなっつゝ急いで事は仕損じるつて言うでしょ？」

いやコレ克蘭が潰れるの確定してるでしょだつてこれ一人と付き合ったらそれ以外の人とは結ばれないつてことだ「だから楽郎君には私たち全員と付き合ってもらいたいんだよね」……………は？

「何言つとんの？」

「だから私たち全員で楽郎君のハーレムを作ろうと思つてるんだよね」

「ハーレムつてあのハーレム？」

「YESハーレム！」

「……………」

「いい考えだと思いませんか？それとも楽郎君は私達のことを嫌いですか…？」

「いや、待つてくれ…少し落ち着かせてくれ…」

「なにも別に今すぐ答えが欲しいつてことじゃないのさ。再来週。もう一度集まるからその時までには答えを教えて欲しいの。お願いね？」

「……冒頭に戻る……」

「なあサンラク」

「なんだよ」

「一応お前に言っておくが…アイツら多分外堀埋めてくると思うぞ？」

「だよなあ…まあ後のことはあとの俺に任せろわ…」

「……齋賀玲の場合……」

「あれ？どうしたの玲？随分ご機嫌だけど」

「そうですよ？分かりますよね！実は私陽務楽郎君の事が好きなんですけど他にも楽郎君を好きな人がいっぱいいるのでハーレムを作ることにしたんですよ！」

『は？』

その日学校は騒然となったという

「……とあるカリスマモデルのSNS……」

『私好きな男の子が居てその子のハーレムを作ることにしたよ☆』

RT35246

イイネ54213

その人物は何者か、という話題が一気に立ち炎上もしかけたが何故か一瞬で鎮火したという

「……とある美少女剣士の場合……」

「あ、お兄様私好きな人のハーレムに入るから転校と一人暮らし始めるね？」

「へ？」

「??????」  
卒倒したという

「〜〜〜某光属性の場合〜〜〜」

「なんで最近校内がお通夜モードなのか瑠美ちゃん分かりますか？」

「それは我が校のアイドルが告白をしちやつたからよ」

「そうなんですか？そんなことがあったなんて…あ、そうだ私ついに好きな人のためのハーレムに参加するんです！楽しみ!!」

『え』

決起集会が起こったそうなの

## ありえたかもしれないハーレム 2

~~~~~シャンフロ新大陸にて~~~~~

清々しい春の陽気を身体中に浴びれるようになった今日この頃。僕はゲームの中で人と木の中間地点みたいなヤツらが蹂躪されていくのを眺めています。皆様はどうお過ごしでしょうか？

「…はあ」

「サンラクくうん君が私の周回場所見たいーって言うから連れてきたのに流石にため息は酷くなあいい？」

「いや最近リアルの方が色々あってお前の方に行くのが安全でさあ…」

「結婚する？」

「今その話題をやめろオ！」

「??何があつたの？」

「美少女剣道家とかモデルとか光属性とか資産家令嬢とかプロゲーマーとかがハーレム作ろうとしてるんだよねえ…」

「ハーレム？ハーレムってあの？」

「うん」

「もしかして企画モノに出演するの？」

「言うと思ったけど違うんだよ…それもうちのクランだからだからさあどうしたらいいんだろ」

「君のクランって言ったらあのアーサーペンシルゴンがいるとこだよね？」

「そうだけどそれがどうs」「ごめんサンラクくん！クエストが途中なの忘れてた！ごめん先に行くね！」え、ええ俺帰りどうすりやいいんだよ…」

くくくとあるチャットルームにてくくく

ディープスローター：サンラクくんハーレム作ってるってホントですかあ？

アーサーペンシルゴン：どこでそれを？

ディープスローター：本人からだよ♪

アーサーペンシルゴン：ということはある程度信頼されてるってことかあ…それで君はどうしたいの？

ディープスローター：私もそのハーレム入りしたいんだよねえ

アーサーペンシルゴン：入りたいって言われてもまだ私からしたら知り合いってだけで信用が出来ないよ

ディープスローター：私の本名は彬茅紗音、彬茅コーポレーション会長の一人娘だよ

アーサーペンシルゴン：は!?!あの彬茅コーポレーションのご令嬢!?!なんなら面識あるじゃん!私!

ディープスローター：え?そうなの?もしかして素顔そのまま使ってるの?

アーサーペンシルゴン：いやフルスクラッチだけど…それなら信用できるね別のグループに招待するから続きはそつちで…

~~~~~学校にて~~~~~

「さて被告人陽務楽郎よなにか遺言はあるか」

「第1にまだ一言も喋ってないし荷物すら置いてないしなんだったらお前から上履き履く前に拉致してきたじゃねえかよ。てか弁護士よこせやなあに初手から死刑確定なんだよ」

「大丈夫だ、貴様の上履きに関してはあちらで家庭科部の山里が冷水しゃぶしゃぶにしている」

「ふざけんな!?!上履きになにしてんだ!」

うーわなんならドライアイス入れやがったな!?!なんか冷氣?が出てて若干高級そうに…見えないなうん

「もう我々の心は折れかけているだから貴様を処刑するのだ」

「ただの理不尽だった。何があつたんだよ」

「我らが光属性隠岐紅音ちゃん、学年誇る美人齋賀玲さん、ティーンの憧れの的天音永遠さんが好きな人のためにハーレムを作るそうだ」

「…ほお…そつ…かあ。そりやファンとかからしたらキツイだろうなあ」

「で、昨日件の齋賀さんは貴様の名前を出したという情報が流れたんだが」

玲氏「…なんで口を滑らせてしまったんだア!? いや納得した訳では無いがマズイ!

「さて被告人よ弁明するか?」

「俺は関わっていない」

「お前綺麗な目をしながら相手を見つめて言えば許されると思うなよ?」

「性善説完全否定をどうもありがとう」

「とりあえず抱いてみないか? 石畳」

「うん、まずはなぜ教室にそんなものがある?」

「ほら、こいよ」

「おらお前らくさつさと席つけ。チャイムとつくになつてんだよ」

「先生! あと数分待つて貰えませんか!? コイツを処刑しなきゃ気が済まないんです!」

「おう、別にするのは構わないが私の目の前ではするなよ? こういうのは知らなかったで済みますのが一番楽なんだよ。てか今日は転校生がいるから早く席つけ」



この教師俺の命をなんだと思ってるやがる…転校生かあ転校生？まっさかあ  
「ほら入ってこーい」

「はじめまして。龍宮院京極といいます。前は京都にいて剣道をしていました。この学校でも剣道部に入りたいと思っております。よろしく願います。」

絶対に見覚えのない人だなあ!?!なんかちよつと住んでた場所とか見た目とか声とか  
が知り合いに似てるけどさあ!

「ちなみにその陽務楽郎くんとはタダならぬ関係ですよろしく願います☆」

…もうダメだあおしまいだあ

「先生唐突に頭痛が止まらなくなったので早退します!」

「なら僕が付き添うよ?」

「結構です!」

瞬間走り出した上履きを履いていなかったからすぐ靴履いて逃げれたぜ…後ろから  
喧騒が聞こえる気がするけど気の所為だろう気の所為であつてくれ気の所為だったら  
いいなあ

「つと衝動的に出てきたけどあとの時間どうするかあ…岩巻さんに相談するか? いや絶  
対面白がるよなあの人…」

「あのお? すいません少し聞きたいことがあるのですがよろしいですか?」

ふと声をかけられた別に少しぐらいなら大丈夫か…

「サンラクくんについて聞きたいんですよオ」

「!?どこでその名前を！」

「ええ昨日も一緒にいたのに酷いなあ私の声をもう忘れちゃったのお？」

この数回しかないが聞き覚えのある声…まさか!?

「はじめましてサンラク…いや陽務楽郎くん♡」

まだこの時には予想が付かなかったんだただの冗談かと思ったんだ

俺を取り巻く人達の力を

# 興味が本気に変わる時 楽郎×頼華

~~~~~side~~~~~  
 ???

「この動画ってシャンフロだよね?え?すっご何この動き!」

「壁をあんなスピードで駆け下るってなに!」

「…ふうすっごかったあ…でも引つかかるんだよなあ」

「誰だっけ?すっごく声似てるんだけどなあ…ん?サンラク…もしかして」

~~~~~楽郎side~~~~~

今朝もいつも通り玲氏とシャンフロについて話したけど結局オルケストラ戦の動画流れてるんだよなあ…オフゲーに逃げたけどいつまでも逃げるわけにもいかないしなあ…てかたつた一日で登録者50万人ってなんだよ…つと着いたから思考切り替えるか

「…ん?なんか下駄箱に入ってる…悪戯か?」

これは…手紙?…これまた古風に何故…

ポンツ

肩に手を置かれた：何故だか懐かしくそして汗が止まらなくなり始めたのを感じる

「なあ陽務よおちよーつと話があるんだがな？面ア貸せよ」

「すまん、朝はあれがそれでこれなもんで都合が合わなそうだ」

「そうか、ほらさつきと行くぞ？」

「問答無用ならさつきの会話する意味無くね？」

致命的に会話のキャッチボールが成立しない我が友人達よ：顔にデッドボール当てれば通じるかな？

「お前なんか物騒な事考えてないか？」

「普段のお前らよりは絶対物騒じゃないから問題ない」

「まあとりあえず陽務3等兵言い残すことはあるか？」

「もはや裁判すら開かれていないんだが？」

「別に良くね？」

「まだ今回は何もしてないんだが!？」

そう、今回ばかりはまだ何もしてないんだよなあ

「今回は、つてのには引つかかるがお前手紙もらったじゃん」

「貰ったな」

「ラブレターだから処刑する」

あれ？急に話しとんだな…もしかして今バグった？

「てかなんでラブレター固定なんだよもつと他のもあるだろ」

「他に持って例えばなんだよ」

「脅迫状とか」

『お前どういう日常送ってんだよ！』

おお、ハモった

.....

「作戦タイム！」

「帰っていい？」

『これ斎賀さんに知られたら不味くない？』

『一般人ですら察知できる威圧感を味わいたくねえよ…』

『でも知らぬ存ぜぬで通せば良くない？』

『そうすつか☆』

「なあ陽務、ほんとに思い当たる節は無いんだな？」

「ないな」

「なら今回は見逃してやろう感謝するんだな！」

「そうか、では皆の者雑じを捕らえるのだ」

「は!?!なんでだよ!話が終わったじゃねえか!!」

「貴様この間雨宿りしながらポエムを書いていたそうだな」

「なんでそれを知ってんだよオ!」

「コンビニ帰りの柳澤が発見したらしい」

「てめえおい柳澤ア!」

「ああまるで君は春風のようなだ。暖かく心地の良い風を「うおおおおア!」

結論としては割と心温まるからいいのでは無いかとなった。

てかこの手紙呼び出しなあ…

『陽務君へ、貴方へ話したいことがあります。放課後教室で待っていてください』

まあいいけどさあ帰ってゲームしたいから早く来て欲しいなあ

~~~~~放課後~~~~~

「ごめん、待たせちゃったかな?」

「ん?いや待つてないよHR終わってからまだ20分も経ってないわけだし」

「覆しいんだね、サンラクくん。」

「?!?!」

「なんでこの人は俺llサンラクだつて知ってるんだ!?!これを周りで知ってるのは玲

氏だけ…あの外道衆は確実に言うことは無いし玲氏も同じ…一体どこで…

「で、合ってるのかな？サンラクくん」

「サンラク？誰のことだ？」

「あれ？シラを切るのかな？」

「シラを切るも何も分からないんだから仕方ないじゃん」

「そっかあ、実は私さ、少し前にシャンフロのサンラクってプレイヤーの動画を見たんだよね。」

「そ、そうなんだ〜」

「そうなんだよ、正直すっごく感動したんだけどさ、なあんか引つかかるなあと思ってなんでだろうって考えたらさ、何かどこかで聞き覚えのある声だなあと思った訳よ」

「う、うん」

そろそろ嫌な予感するからこれ付けるか…

「そうなんだよ、それで…ってえ？まってまって何それ」

「ん？ああ気にしないでいいよ続きよろしく」

「え？いや急にそんな電光掲示板見たいな被り物し始めた人を前にして流石に平静を保つのは無理があるよ？」

「まあまあ、いいじゃないか」

「ふ、ふーんこれで更に確証が深まったよ！君、顔隠フェイスしてもあるよね？」

「( ; ; ; ; )」

「え？なにそれ便利…じゃなくて！なんで私が確証を得たのかわかって言うかね実は少し前にシャンフロの動画を見たんだよね。とにかく感動しちゃってねえ」

「( ^ ω ^ ; ; ; ; )」

「でも見ててどこかずっと引つかかってたんだよねえ」

「そうなんだ…」

「それでよく注意して聞くと声が君なんだよねえ。玲から君はゲーム好きでエナドリ狂というの聞いてたし。それにサンラクって名前、自分の名前1部使ってるだけじゃん」

「…ぐう」

「グウの音は出たみたいだね、てかそれをリアルで言う人初めて見たよ。てかホントシャンフロも驚いたけど顔隠しまで君だとはねえ」

「この人鋭すぎるな…諦めた方が早いかな…」

「なんで俺が顔隠しだど？」

「元々エイトちゃんが好きだったんだけどGG—Cの時も見てて動きすごいなあと思ってたんだけどやっぱりそうか！」

「うーわ油断してた…もうバレたのならいいやサンラクこと陽務楽郎よろしくね」



「私は得間頼華、気軽に頼華って呼んでね楽郎君」

「よろしく。で、結局俺を呼び出したのはなんで？ 確証を得たいがため？」

「それもあるけどーっお願いがあるんだよねえ」

「なにが？」

「手伝って欲しいゲームがあるの！」

~~~~~30分後~~~~~

「まさか手伝って欲しいゲームがスクラップガンマンだったとはね」

「前にふらっと寄った時に筐体があるのを見てやりたかったんだけど一人でやるのはねえって。もしかしてやった事があるの？」

「JGEに行ってたからね」

「だからかあ…ほんとごめんね？ 足引っ張っちゃって」

「引っ張ってないよ。てかほんとに初見プレイ？ それなのにB評価って凄いでしょ」

「えへへ、ありがと。でも喉乾いちゃったよ」

「そうだね。なんか買ってくるか何がいい？」

「え？ いいの？ ならお茶をお願い出来るかな？」

「分かった、ならすぐ買ってくるから待ってて」

「うん。よろしくね」

.....

うんデジャブかな？頼華さんがナンパされてるよ…この光景前にも見たなあ…確か JGEの時は玲さんがお花摘みにいったらうって感じだったかなあ

さて、行くか

「ごめんね頼華、そろそろ帰ろうか」

「ら、楽郎君？」

「ごめんな兄ちゃんこの子はちよつと俺が借りるからよ、一人で帰ってくれや」

「遅くなつてごめんお茶がなかったからおしるコーラ買ってきたよ」

「え？まっしておしるコーラ？なにそれ」

「いやほんとになんだよおしるコーラ」

「てかそこのお前、流石に古典的すぎるだろ面白味がない3点」

「は!?なんだテメエ！調子乗ってんじゃねえぞ！」

うーむ今回もやっぱりつかみかかって来るかあなら

ガッツ！

「痛った！」

足払いに限るんだよなあ！

「ナンパなんかするより体幹鍛えろバーカ！よし逃げるぞ頼華！」

「う、うん!!」

~~~~~10分後~~~~~

「ここまで来れば来ないだろ」

「ありがとう楽郎君、でもおしるコーラは許さないから」

「あ、そんなにまずかった?」

「ほんとに不味いよ!?!なんならまだ残ってるから飲んでよ!」

うおつ、そんなに不味かったのか? まあ別に飲んでもいいが…

「間接キスになるけど大丈夫?」

「かつつつつ!べ、別に構わないよ!ほらグイツと!」

大丈夫ならいいんだが…ゴク

「うわまつつ!何コレ!え?うわやつば…」

「でしょ?覚えときなさいよ!明日絶対に面白味の飲み物飲ませてやるんだから!」

「うへえ…勘弁してくれ」

「それじゃ私ももう行くから!また明日ね!」

「おう、また明日な」

~~~~~翌日~~~~~

「さあて陽務くうん遺言はあるかあい?」

「流石に登校してノータイムで処刑開始はおかしい」

「貴様が昨日美人と有名な得間さんとデートをしていたとの情報が入っている！白状す  
楽郎君いるかなあー？」

ナイスタイムミングひやっほう！

「ここ！ここにいるぞ!!」

「昨日約束したドリアンソーダだよ？美味しく飲んでね☆」

「え、今このタイムミングでその話は…」

「あ、得間さん話し終わった？終わったなら陽務借りるね？」

「え、あ、うんいいけど…楽郎君！またデート行こうね！」

「それは誤解が生まれるやつう！」

「なあ陽務、抱いてくれないか？」

「フレに呼ばれたので抜けますねへへ\*」

『ひっ捕らえろ!』

~~~~とある教室にて~~~~

「ごめん玲、私もう貴女のこと応援出来そうにないか思」

「え？急に何が「私も楽郎君が好きになっちゃった」

「譲らないから」

!?!?!?!

石畳を」